女鑑

明治二十九年十一月二十日發行



東京國光社

女鑑第百二十一號

目録

棚津姫



女子の遊學

女子の遊學とは、遠近の里に鄙住居する家の女子どもの、獨り都にまうで上りて、こゝかしこ知る知らぬ家に旅居して、志したる道々のもの學びするをいふなり。さて、こゝには、それに就きて、危く心もとなくたばゆることどもあれば、それを注意しまるらせんとてなり。

女子の遊學するも、ゆめ〳〵惡しきことにはあらずかし。そは、もの學ぶといふこと、もとより女子にもありたきことなればなり。否、女子にも是非にあるべき道なればなり。殊に、今は我が國も既に東洋の文明が中に最もうるはしく最も優れたる國なりといふことと世に知れわたれり。これよりいよ〳〵進みに進みて、やがて西洋の文明をもうち越えて、全世界に最も美はしく最も優れたらむ國と成らむとするにさへ至れり。今こそ、われも人も女子たちも、大に奮ひ立つべき時な

れ。奮ひ立ちて、今こそ大に勉め勵むべき時なれ。
かゝれば、女子の學問することも、もとよりいと必要なり。勉めて學ばざるべか
らず、勵みて學ばざるべからず。學びて有益の才を貯へ、學びて優美の藝をれば
ら、學びて高尚の徳を具へざるべからず。かくて國家の有益なる優美なる高尚な
る女子とならざるべからず。磨かざれば寶玉も光り無く、學ばざれば人たる靈妙
のふしもあらはれず。女子の學問、誠に誠にありたきことなり。されば、さばか
りたよりとぼしき田舎われりよ住める者の都に出でゝもの學びするも、また、さ
るべきことなめり。

されど、また、甚だ心もとなく危く思ふ事あり。たゞにこの杞憂のみにもあらず、
遊學の爲めに、なか〳〵に世に益なく用なき女子と成るのみならず。甚しきは、
身をあやまち、家をやぶり親を恥かしめ、世をなげかしむる不孝不徳の女子と成
りはつる者あるは、世にをり〳〵きく所なり。されば、遊學は大に謹みて行ふべ
き事なり。

今、故郷を離れ來て都の空に遊學してある女子の年齡を考ふるに、はやきはやうやう十三歳ばかりなるをもきけど、大概は十五歳以上の年齡なるが如し。この年齡は、女子の一生の間の、極めて大切なる極めて危險なる時期なり。そは、やがて、女子たちがやう〳〵童心を立ちはなれて、世の女心を知り初めむとするほどなればなり。

而して、僅に女心をればゆといへども、いまだ世のむづかしき風雲は、毫も知らざるなれば、なほ白紙の如し、これよりあかく美はしき色にも染むべく黑く汚き色にも浸むべきなれば、極めて危く、極めて大切に、極めて注意すべき時なり。かゝる危くも大切なる時期を、獨りやさしき父母の守りを離れ、美はしき家の庭を出でゝ、ればつかなき他鄉に馴れぬ假りねして、うける世に立ち交りゆきたらむは、いかゞ危くればつかなからむ。ぬば玉の闇夜に九折る山路を獨り行きたらむよりも、雨風烈しきあらしに八汐の灘を獨り漕ぎたらむよりも、いとあやふくればつかなきことぞ。されば、まゝ、人の行くべき道を踏みあやまちて、汚くあ

さましき淵に、あたら身を墮落しはてゝ、世にやうなき人と成りはつるものあるは、嫉まむよりは、なかなかに哀れむべきことぞかし。かゝるくちをしき淵に沈みはつるは、もとより其の人の心の堅固ならざるによれりといへども、其の父母たる人の注意の足らざるにもより、殊には、其の身を寄寓する宿の正しからざるにもよるなり。さては、また世の中の風俗の良からざるにもよるべし。

女子の遊學は、あしきにあらず。女子も父母も教師も注意の足らざるが故に、心もとなきなり。まづ志を堅固にすべし。而して、父母はその女子の志の堅固なるを認めなば、さて正しき宿を賴みて、これに女子を寄寓せしめ、われに代りて朝夕の管督をもたのみきこゆべきなり。さすれば、やゝ心安からむか。學校にても、やゝ女子の下宿に就きて注意する處ありしやうなれど、なほ足らずとたぼゆ。一層の考慮をこそ希望するなれ。



論說

婦女子と海難救濟

石榑千亦

四面海水をもて取かこまれたる國柄にありては、海によりてなる業もとより多かるべきは論なし。たゞ其國内に往きかふのみにても、なほ船の便をからざるべからず。まして外國へと志さむものは、いかにしても免るべからず。されどまづ海によりて成立つくさ〴〵の業をあげてむ。

交通

運輸

漁業

これらは其重なるものなるべし。なほこの他四圍を護り以て外寇にあて、神代よりこのかたかりにも失墜せしことなきわが國威を保たむがために、最必要なる海軍そのものゝ發達は、蓋已むなき結果なるべし。されど德川幕府三百年間鎖國のかため嚴にし

て、遂に進取の氣を缺き、進まではねわらぬ我が國勢を強ひて壓へて、大船の製造を禁め、擅に遠く航することを制し、爲に交通、運輸の道ひらけず。從ひて貿易の業はかく／＼しからず。無盡藏の水產を有しながら、そをとりて他邦に致すが如きこともなく、世は太平を謳ひてのみありしに、一朝勢するとき氣運の到るに會ひ、五港を開きて輸出入の道をひらき、大に眼を海外に走らするものあるに至りて、維新の大政は布かれぬ。

されどいまだ外人の目よりは日本國のありともればねざりしに、端なく淸國と戰爭を開くに當り、龍虎の風雲を得たるが如き勢をもて、一氣叱咤殆ど城下の盟をなさむとするに至りたるを見て、はじめて淸國の隸屬なりと思へりしは妄想なりしこと、むしろ淸國よりも強きこと、あらず、世界の強國と伍をなすに足るべきを知り、わが國あるを覺りたると同時に大に畏るべきものとするに至り、こゝに我が國海軍の增設は已むを得ざる場合に接したり。かく內外より迫れる氣運は、わが國の海によりて起り、海によりて成さゞるべからざるに至らしめぬ。かくて交通、運輸、漁業の發達、海軍々備の擴張は見るがうちにいやます／＼に開けなむとす。

さても、かく海上に於ける事業の進むにつれて、又その裏面をうかゞへた、悲しむべ

き難破のそれに伴ふは、蓋自然の數なるべし。されども、この近き十ヶ年に於ける難破の數を見よや、こは未ださまで進まざる時代の調査にかゝるものぞ。

自明治十八年至仝廿七年遭難船數（遞信省管船局の調査に由る）

年度	破壞 艘	損傷 艘	沈沒 艘	漂流 艘
一八	三九七	一二二	—	一〇
一九	五一三	一四九	—	二七
二〇	四〇三	一一九	—	九
二一	三四七	一一二	—	九
二二	三三五	一二六	—	一三
二三	一四七	一〇六	—	九
二四	六六二	一二二	—	六
二五	二四七	一六七	—	一一
二六	三五〇	一一三	一一七	二五
二七	二四一	九九	—	一一
計	三、六四二	一、二三五	一一七	一三〇

自明治十八年至仝廿七年遭難人員

年度	死亡 人	負傷 人	漂流 人
一八	一〇一	二一	四六

一九	一九三	一五	四一
二〇	八九	二五	一七
二一	七五	二二	二〇
二二	一一四	一六	二〇
二三	一五二	一〇	六九
二四	六二二	三八	二三
二五	一六六	七	七一
二六	三一七	一三	一九
二七	一二二	一四	一七
計	一、九五一	一八一	三四三

あはれこの表を見れぱ、不覺身体粟を生ずる感あり。されどこは僅かに五十石以上の船舶に於けるもののみ。かの局の船籍にのらざる五十石以下の傳馬、艀、端艇などの小船を、假に五十石以上の數に倍せりと見れは、其悲むべき數も亦これに二倍もしくは三倍の多數を見ざるべからず、そは單に想像に止まるのみならず、實際はなほ幾層倍なるを如何せむ。嗚呼、年々無辜の生命が魚腹に葬られ、無算の船舶が藻屑と化して、歸らぬ波の泡沫となり了るものそれ幾何ぞ。已れはこれをいふを好まず。

眼を放ちて、歐米諸國の、これが救濟に盡せる事實を察すれぱ、實に驚くべきものあ

り。あるは官設に、あるは官私混淆の事業に、天皇の御保護の下にあらざれど、皇后の管理の下にあり。皇子、皇族之れが先となり、名門、貴紳相率ゐて赴かざるなし。故に生活を海上に營まむとするもの、みな安全にして顧慮する所なし。さてこそ海事の發達進歩は一層の隆盛を加ふるなれ。

わが國亦曩に私設水難救濟會あり。海上保護の主神金刀比羅大神に宮仕して、最此事業に縁故ある宮司琴陵宥常氏の首唱にかゝれり。もとは、黒田伯爵の歐州漫遊の折になれる、環遊日記の一節、露國水難救濟會の條によりて發意せられつる所のものなりとぞ。爾後數年間幸に諸士の賛助を經て、事業は漸く進歩し、昨年度の帝國議會は、國費をもて其事業を大成せんことを決議するに至れりき。

われは其官と私とを問はず、わが國の如き海國にありては、とく其手當の完全せむ曉を待つものなり。さるをかの會につきてきけど、最或悲慘の事情につきて同情の涙多き婦女子のこれに賛助して會員となれるもの、僅々二三の數を出でずと、あゝこれ何たる事ぞや。

日本赤十字社の開かれてより、貴婦人より一匹婦に至るまで、大かたこれに賛助し、陸上に於ける非常の折には、やごとなき御身をも忘れさせ給ひ、繃帯をつくり、看護

の任にあたり、ある時は演劇の催主となり、ある時は物賣女と身をやつし給ひてろの收益を義捐し、よく其慈善の事業を翼贊せりと稱す。然かもそは陸上に於ける非常にあてむとするにあり、海國日本にありては海上に於ける難破は一日も絶ゑたる折なし。いつも海上は常なきなり。いつも板一枚の下は地獄にてあるなり。さるをこの海難救濟事業に協贊して、裏面的より大に海國思想の養成をはからざるはいかに。陸上の赤十字、海上の水難救濟、われは諸輪の車ともいはむとす。さるを一つはあつくして一つはうすく、一つは高くして一つは低し。これ片輪車に非ずして何ぞ。これにても海國日本の体面を維持せりといふか、海國子弟を養成する慈母の責任を盡したりといふか、われは疑なき能はず。

いよゝ開けゆかむずる海事の上になほ一層の進歩を與へて、純粹なる海國子弟を養成し、商業上にも軍事上にも、我が國をもて、あはれ海上王となさむと思はゞ、嗚呼海國の母たるものよ、須く一番の注意を要せざるべからず。出るにも入るにも、物はこぶにも、產物をとるにも、攻むるにも守るにも、みな海によらざるべからざるわが海國日本の母よ。

臺灣の女子（つゞき）

大谷聽濤

臺灣の女子の婚姻は、概ね二十歳を超ゆるもの丶如く、我が內地に比して早婚の弊較や少きが如し。されど彼等が結婚する、必しも自ら其の夫を擇ぶにあらず。又其の父母か、其の夫たるべきもの丶爲人を看拔きて之に娶すに非ず。只金錢を贈るの多きものに其の女を與ふるなり。故に人に婚を勸むるにも、婦を娶れと言はずして、婦を買へと云ふ。余も亦臺灣に在る日、幾度か婦を買へとすゝめられたることあり。余は笑を忍んで試に其の價を問ふに、百金乃至二百金を投せむ、容貌も年齡も唯君の思ふ儘なりと答へぬ。而かも此等の言を爲すものは、臺北にて紳士と稱せられ、若くは城內總理の地位にあるものなるを思はゞ、婚姻は一種の人身賣買にして、因襲の久しき、彼等は之を見て敢て奇と爲さず、亦恥となさゞるを知るべし。臺灣人が好んで人の女を養ふて子と爲すは、其の婚嫁の齡に達するを待ちて、之を高價に賣らんが爲のみ。

臺灣の女子は、其の心頗る高潔にして、物を與ふるも妄に之を受けず、又之を受くるときは、務めて返禮を爲すは、殆んど支那人の血統を引きしものとは思はれず、此の點に於ては其の性情我が內地人に類せり。

又彼等は男子と交際することと無頓着にして、此の點に於ては寧ろ歐米人と趣を同うす、

然れども又老者に對する美風に至りては、我よりも尙長じたる所あるが如し。

臺灣の女子は總て浴することゝなし、されど彼等は垢染みたる物を身に纒はず、一年三百六十五日間、朝な〳〵洗濯せざる日はなく。又食後には湯もて身体を拭ふを常とす。其の每朝髮を梳り、化粧を畢りし後に非れど、掃除にも食事の用意にも取掛らざる身嗜に至ては、大に佳すべき處あり。

臺灣の女子は支那人と同く、顏の圓きを尙べり、故に額の毛を拔きて、成るべく其の顏を圓く作り、眉は絲の如く細く剃りて、其の形を弦月の如くせり。髮は十三四歲まては下髮となせど、十四五歲以上は悉く束髮にして、花簪を挿み、或は四季折々の草花を挿めり。六七十歲に餘れる老婦人が、大なる薔薇の花簪を挿めるは、臺灣人の獨特にして、余等の目には何となく狂人じみて見ゆ。

臺灣の女子は、稍々身分あるものは、其の足を小くすること支那人と毫も異ならず。貧賤のものは內地人と同く、其の足を自然に任せ、少も之を緊束し縮小することなし。其の足の小なるものは、常に靴を穿ち、其の足の大なるものは常に跣足にて步行す、臺北臺南等市街を爲す地は、足の小なるもの多く、山間僻陬の地に到れど足の大なるもの多し、中歷地方にては殆んど足の小なるものを見ず。足の大なるものは賤きものと

して輕蔑せらるゝを以て、足の寸法を人に知らるゝを耻ぢ、如何なる富家の女子と雖も、自已の靴は自已自ら之を製せり。其の靴に刺繡せる花卉の類は、巧妙觀るに足るべきものあり、概して裁縫は内地人よりは精細緻密にして、一見器械縫の如きものを作れど、時間を費やすこと甚し。

臺灣の女子は、中等以上の生活を爲すものは、好んで鴉片烟を喫す、中等以下のものと雖も、之を喫するを好まざるに非ず、價貴くして喫する能はざるなり。男子に比すれば之を喫するもの少けれども其の之を喫するや、白晝小暗き室に横臥し、煙管（火吹竹の如きもの）を口に啣へて、且つ喫し且つ眠る。人の之を見るあるも醜として愧ぢず、其の樣實に見るに堪へざるなり。

臺灣の女子は、多く、淺黄色の上衣と袴（内地の男子のズボンに似て少く太きもの）を着け、間々紫色の衣を着くるもあり。されど其の服裝は概して華奢ならずして寧ろ質素を貴べり。

（未完）

女子敎育一班（二十九）

三輪田眞佐子

第四、家政の智識、女子の本領は家政にあるを以て、女子敎育につきて智育を論ず

るものは、深く玆に注意すべきなり。さればにや、大概の女子教育家は、家政の任に堪ふる能力を養ふのみを以て女子教育終れりと言ふめり。

先つ家庭につきての觀念なかるべからず。そもそも家庭とは、單に人の住宅をいふにはあらず。亦家族の群居を指すにもあらず。必竟人類の人類たる生活をなす燕居團欒を名づくるものぞかし。

されば、家庭は、禽獸魚鼈の巢屈と異なりて、高尙なる趣味なかるべからず。乃ち一門聚りて人道を蹈み、長幼序あり、男女別あり、主は主たり、僕は僕たり、四季天然に法り、居所分あり、衣服禮あり、將た飮食度あるなど、一種の主義定まるにあらざれば、たとひ、朝な夕な、炊烟竈にたち、內外の人門戶を出入せんも、未だ完全なる家庭とは言ふべからず。

亦、家庭には快樂なる分子を含まざるべからず。但しおのれの言ふ快樂とは、遊惰放逸以て肉体の欲を恣にすることにはあらず。春秋の花紅葉など、天工を以て人事に章なし、子は親の安樂を求め、親は子の立身を歡び、時とすれば朋あり遠方より來るなど、生存の道におのづから風情あるべきなり。凡そ人生に快樂なきときは、殺氣世に充ちて、各業に安すること能はさるべし。

蓋、高尚のみを尊べば社會は無味に流れ、快樂のみを悦べば社界は奢侈に陥り易きは通俗の習なれば、中庸の道に適ふやうつとむべし。おのれ、こを思ふ情切なりしかば、嘗て（太陽）第二卷第九號に家庭の觀念と題して愚見をものせりき。讀者便もありて見給はゞ、さちこれに過ぐるものなからむ。

かゝる家庭の觀念を養ふに道ありや。おのれおもふに、この觀念は學術を琢かむ可ならんか、わきて文學の趣味を心得ることぞ良けれ、されど、女子の文學を研究するに當りて戒むべきは、文學の主義を撰ばで、單に文學を以て字句の末技を味ふ快樂と思ひ、あるは私怨私情をはらすものと考へ、あるは世を果なきものとかこち、陰遁的の理想のみを弄ぶものとすれば、果して文學の本体かゝるものならんには、所謂文學は人心を攪き民心を亂し、なほ風俗をさへ華奢淫逸にせしめて、亡國の種となるものなればあらずもがな。

おのれの女子に望む文學なるものは、天然の美妙が、人心の至靈に影じて、おのづから文となり歌となるものなれば、文學なるものは高尚偉大、且つ不朽にして、最も尊き理想なり。故に女子これを味へば、節操慈悲優美雅致、あるは綿密などの婦德備りて、舅姑に事ふれば孝となり、良人に對して貞となり、子にも僕にもさては世人にも、

事々物々宜しきに適ひて、至善の人となるべし。

次に經濟の思想を養ひて、供給需用の關係を知り、冗費を節減し癈物を利用し。入るを量りて出すべし。蓋、女子は、天性綿密なれど、人より吝嗇と譏らるゝはどなれど、事の大局に迂けれど、往々男子の笑を蒙るところあり。されど、女子の修むる家事經濟は、言はずもがなの事を省きて、專ら女子の欠點を補ふことこそ肝要なれ。

亦衞生の何物たるを辨ふべし。衞生は健康の基にして、百の幸福もこれより來るなり。凡そ衞生につきて食物飲料衣服をはじめ、住居の空氣、光線の關係、及び掃除一般は婦人の責任あるものなれど、女子はこれにつき大体の智識あるべきなり。然るに、今日行るゝ衞生の書は、多く外國の書に基くを以て、我が國に實試することを能はざるふしも少からず。さなくとも、女子のために必要なることをものせし書少きはあかぬ心地こそすれ。

料理は、衞生經濟禮義などを兼ぬることを忘るべからず。世人曰ふ、學校育ちの女子は、(カツレツ)(ビフテーキ)など我が國の常食にあらざるものを知り、反て日用の飲食を調ふるは拙なりと。若し然らんには、學びし甲斐なきものとこそ言ふべけれ。何となれど、智識の要は、これを胸中に蓄ふるにあらずして、これを實地に用ふるにあ

れむなり。讀者省てよ。
なほ、婢僕を御することをも知らざるべからず。思ふに婢僕を御するは、恩威ならび行はるゝを善しとするは何人も知ることなれど、主婦にこれを御する才徳なきときは、反て婢僕に御せらるゝ傾あり。おのれ思ふに、一般の女學には、婢僕を使ふ心得あれど、かゝる二三の注入的智識にては、主婦の体面を全くすること難し。されど、女子は精神を養ふ學な怠りそ。
以上にものせし種々の智識は、家政を主るにつきてなるべからざるものなり。



史談

棚津姫　　壚井ふく子

父母の命そむくべからずといへども、その親過あるも諫めずして、不義をなさしむるは、子たるものゝ道にあらず。女子は、和順をむねとして、親、夫に、やさしくかしづくべしと雖、その夫、理ならざる事をなすも、道にたがふも諫めざるは、また女の

道にあらずかし。

むかし、　雄略天皇の御世に、物部のうしろのすくねと云ふ人ありけり。その妻を棚津姫と云ひて、生れつき恵み深く、物をあはれみ、よく家をさめて、よこしまなる心つゆなし。さるに、夫のすくねは、心おごりて、常に身をたかぶり、人に向ひて禮なく、ともすれば怒りたけりて、のゝしりろしるに、妻、いたく之をうれひ、日來事につけて諫めし事幾度と云ふ事を知らざれども。すくねは、よく／＼心足らはぬうまれにてやありけん。なほ人をありとも思はぬふし多かり。

さて、此の帝の十八年の秋八月に、伊勢のあさひのいらつと云ふもの、かしこくも王命にそむきまつり、己が力の強きをたのみて、民をせめむさぼり、貢物を奪ひとり、はしいまゝにふるまいければ、　天皇、すなはち、此のすくねと、物部のさくはんのむらじとを將軍となし、兵をそへて、之をうたしめ給ひぬ。あさひのいらつ、早くも此の事をうちきゝて、伊賀のあをむりと云ふ處に出でてふせぎ戰ひぬ。

はじめ、此のうしろのすくね、王命を承りて、いくさだゝんとしけるとき、己がくみ下のいくさのかみ、たづかのすくりと云ふものゝ、前に立ちたるを、無禮なりとて、大に怒り、さかしまなこににらみて、のゝしりつけ、手をもあげかねまじき氣色に、妻

はおどろき、あわてゝ袂を扣へとゞめたれど、その儘に事やみて、いざ立たんとなしたる折りふし、兵おくれてすゝまざるに、またもやすくね、みじかき心に忍ばれず、聲をあらげて怒りどよむに、妻また鎧の袖にうちすがり、みいくさの御先き、つはものどものすゝまざるは、さこそくやしき事には侍るめれど、さやうに御怒りつよく、御聲あらゝげられては、なほ更すゝみ侍らざらんと思はれ侍りぬ。御軍の大將は威ありて猛からず、つはものになさけありて、恵みをほどこせばこそ、もろ〳〵の軍勢、その恵みに感じて、身命をもつて報い侍らめ。今あながちにはやり給ふ御心にまかせて、怒り猛り、軍のかみにはぢ見せ、つはものどもをのゝしりこらし給はゞ、誰れか二つなき命をすてゝ、君がためにたゝかはんといたし侍らん。よく〳〵御心を忍びやわらげて、兵士どもをいたはり卒ゐ給はずば、此のたびの御軍、はか〴〵しからず、思ひやられ侍る、のう我が君、將士は君が股肱、兵士は君が手足、ゆめあなどり給ひぞ。返す〳〵も此の御いくさにうちかち、上は天皇に報じまつり、下は家を保ち、身をやすんぜんと思さば、必ず心を和らげ、人とよくはかりて、然るのちすゝませ給へ。無禮不義は、今日此のころせむべき折りには侍らじとくれ〴〵も諫めぬ。あはれ此のすくね、此の時、此の妻の言、誠に善言を得たりとて、よろこび聞きて、氣

を下して將士どもとしづかにはかりなど、もとよりかしこきすめら御軍、勝利あらんは必定なりけんに、をしいかな、すくね、此の妻の言葉よくもきかずして、あせりて馬にまたがり、旗さゝげて、れどりはこりてむかひたるぞ口惜しき。

既にいくさに及びけるに、あさひのいらつ、自ら矢をつがへて呼はつて曰く、我が射る矢先きには誰れかたつ事を得べき。これ試み給へとて、ひきしぼりてはなつ矢に、大とものはからじといふ大力の兵の、二重ねの鎧を射ぬけて、うしろの岡にのぶかに立ちこみたり。すくねが兵ども、大にれろれて、蜘蛛の子をちらすが如くみな逃げくづるゝに、すくね大に怒りて、かけんとすれども、大軍ひきたてゝ逃げけれど、如何とも力なく、是非なくもろともにひき退きぬ。これいくさのかみたづかが、すくねをうらみたれど、わざと兵をひきとり、思ひの外の恥みせんとて、かくははたらきしなり。さて、すくねは、怒りたけり二日一夜、あせりにあせり、のゝしりどよめども、兵士ども誰れ一人すゝむものもなかりしはいとあさましきことどもなり。

こゝに今一人の大將、物部のさくはんのむらじは、みづから太刀を拔き、まつ先きにすゝみ、つくしのきくのものゝべの大をのてと云ふ兵に、楯をつかせてせめかゝりぬ。あさひのいらつ　之を見て、大の矢をつがへて放つに、ふたへだてを射ぬきて、大を

のてが兜の星を射けづり、はるかのうしろに扣へたるまつらぎと云ふもの丶足にたちたり。

さくはんのむらじ、此のひまにかけよりて、あさひのいらつと引き組み、首をとらへて、むなもとをしたゝかにさし貫きてうち殺し。餘のはしたどもをも平らげて軍を返し。京に奏聞しぬ。

うしろのすくねは、思はぬれくれをとり、今は天皇にあはし奉る面もなしとて、恥ぢて家にこもり居りしに、天皇、事のやうすを尋ねらるゝに、さぬきのたむしと申すもの、奏するやう、しろのすくね、二日一夜の間に、せめれとすこと能はず、ものゝべのさくはんのむらじ、是をやぶりて、あさひのいらつを斬りたるに、すくねは恥ぢて、返り事申さゞるなりと奏聞す。天皇、いからせ給ひて、うしろのすくねが、ゐなべの田を奪ひとりて、むらじに與へ給ひぬ。

あはれ、此のすくね、晏子が御者の、かつてその妻の諫言をいれて、身をつゝしみし如く、此の賢姫のいさめをきゝいれなば、かゝる口惜しき事は見ざりしものを、時の人、棚津姫仁智あり、かねてより此の事を知りて諫めしを、夫、用ゐずして、遂に家亡びぬとぞ云ひけるも、うべや。

鳥居氏の妾

安藤紫光

德川十二代の將軍家慶の世、老中水野越前の守に知遇せられたる町奉行鳥居甲斐守忠耀、その威權おさ〳〵諸侯をも凌ぎ、一度その眼にあひては空とぶ鳥もれつへく、一度その怒にふれては泰山もくつれぬべし。道路目を側て之を畏れ、ひたすら意に隨ひて忤ふことなし。門に諂諛の履聲たゆることなく、閣下の爲ならはと誓ひし人そも幾何なりけむ。

榮枯盛衰はげに夢なれや、時めきし水野越前の守も、その政令煩苛なりけれは、やうやう人の怨をかひて、終に罷めらるゝに至りぬ、その知遇を蒙れる人かゝりけれと、さしも赫々たりし鳥居甲斐守の威權もうすらきゆきて、後にはその所業の奸濫なりしことさへあらはれ、さる所に御預けの身とはなりぬ。鳥居の身かくなれゝと、けに賴みがたきは人の心かな。昨日までは無二の忠臣斷金の親友といひなしたる人も、今日はいつくにかさる人のありしといふ、れもゝちして又見もかへらす。いかに勢利にのみ趨る世の常とはいへ。たとひ鳥居は奸濫なりしにもせよ。その爲に利を得たるものもありけむ。その爲に恩をうけたる者もありけむ。さるを、かゝる人心ころげに薄きものなれ。

れしなべて世はかく勢利に酔へる中に、獨さめたるものこそありけれ。こは元より道しき事を心得たる者にもあらず、又は元の根ざしのよかりし者にてもなし。身は賤しく数なき鳥居氏の妾もとは氏もあらざる者とかよ。されどこの爲せる業の殊勝さは、世に道々しきことを心得たる人もなか〳〵にはづかしかるべし。世の名利にのみ趨きて他を顧ぬもの、之をきゝて果して如何にか思ふらむ。

鳥居氏の妾は、甲斐守が御預けになりたるを聞きいたく驚きたるが、詮術もなし。さはれ、いかにもしてその不自由を助けまゐらせむとは思へど、こも女のかよわき身をいかにせむ。貢きくるゝ者もなきに、かつ〳〵細き烟をたつるのみなれど、平素の御厚恩報いまゐらせむたつきもなし。されど志のしるしばかりにもど、便ある毎に天保錢二枚づゝをおくりて、その不自由を助けたり。この送れるは僅二枚の天保錢にはあれど、その眞心はげに千尋の海の底なしてはかり知られず。雲にそひゆる富士の高ねも及ばざりけり。諺にいはすや、長者の萬燈、貧者の一燈と、世人滔々として勢利に趨き、恩義の何物たるかを辨へざる當時、かくの如き人のあらはれたるは、けにたくひ稀なることなりけり。道を心得て世に知られたる人にも、かゝる行は得難きに。過ぎ去りし榮華を夢に見て、空しく閑窓に呻吟せる鳥居甲斐守、人は皆背き去りて心

を慰むる者もなきに、いたく世人の輕薄をなげく折柄、妾の許より送り來る二枚の天保錢には、いかなる感をか懷きし。その篤き眞心よりの送り物には、いかなる熱涙をか點せし。かゝる者より恩義を報はるへしとは、夢思はさりけむを。ろの妾も甲斐守かろの熱涙ころのろましきなりけれ。彼は二枚の天保錢を心よくうけくれむことを望みしにあらす、只そのれくる心を確に汲まれむことを喜ひしなり。かくて甲斐の守が預けられてありし二十八年の間、便ある毎に必二枚つゝ、れくりて、欠くこと無りきとぞ。

短き程のことは誰しもたへうへけれと、只難きは長く久しき間をつとむるにあり。去る者は日々に疎くなりゆくは人の常なりけり。さるを鳥居氏の妾は、二十八年の長き月日の間、一度もろの送り物をかゝさりき。一わたりの心にてはいかてかなしうへき業ならむ。深き心の誠よりいてこしにあらすは必たゆまむものぞ。けにやかゝる誠ある人には、去る者は日々に疎しなといふ言草は、ゆめにもひきいつへきにはあらす。世の嬢達、之をよみていかに思ひ給ふろ。

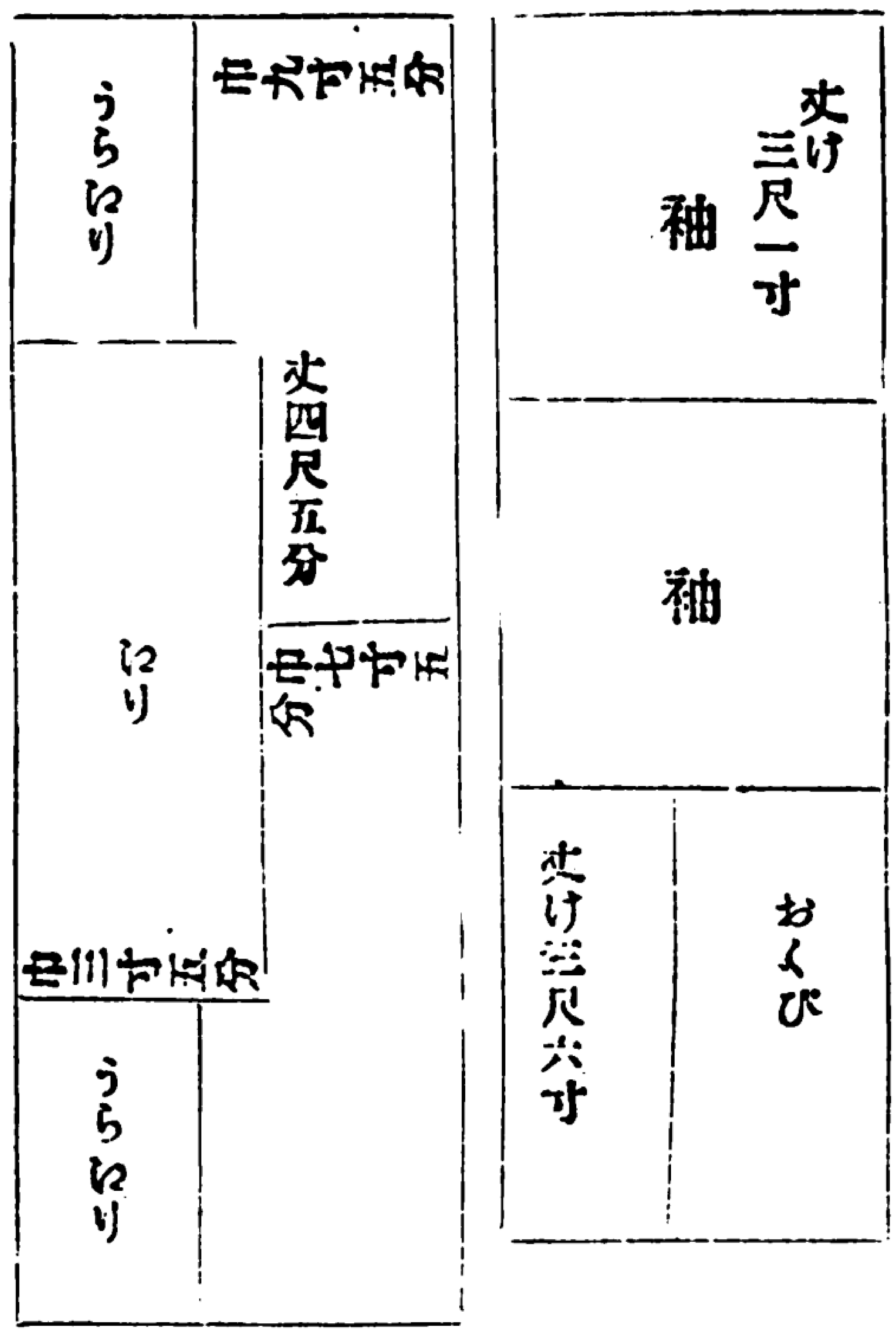


家政

たちぬひ

西山たい子

(五十三) 八丈巾本裁ものゝ裁ち方



(八丈巾本裁の裁方)

總計二丈六尺

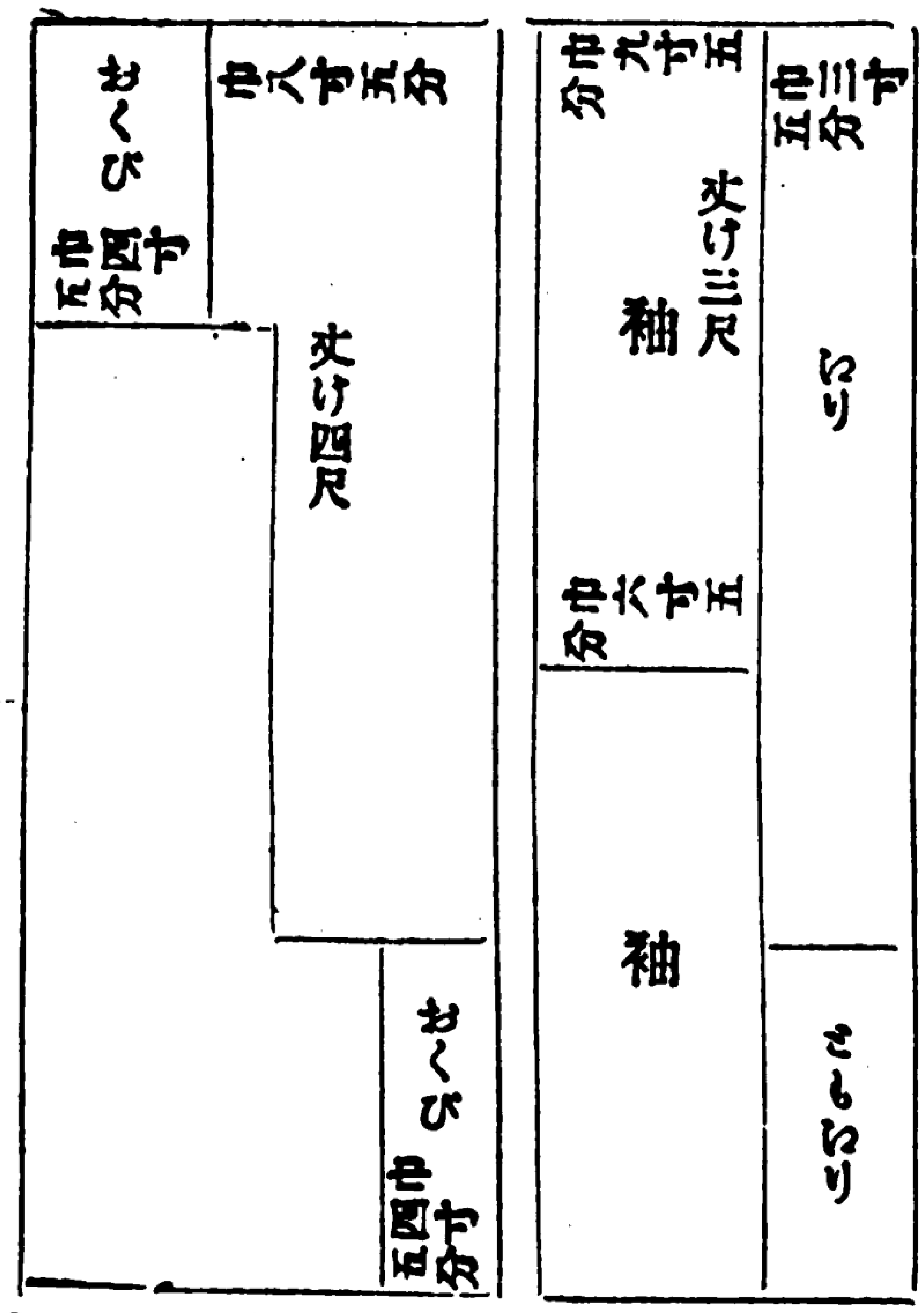
圖の如くまづ兩袖をとり、それより殘りの切れを五つに折り、(但し一片は衽にするなれば衽下りだけみじかくすべし)になし、その衽となすべきみぢかきものを切りとり、殘りを四つに折りて身衣とし。襟形三寸五分ばかりあけ、そのあけたる處より、袋になりたる方をたてに眞直ぐに切りて襟となし、後巾より裏襟を切りとるべし。寸尺等は圖により見合すべし。また袖巾あまりひろければ、縫ひこみにせんも無益と思はゞかきとるもよし。そは隨意たるべし。

(五十四) 縮緬尺三寸巾本裁ものゝ裁ち方

まづ兩袖ぶりをとり、袖わきより襟をとるべし。殘りの切れを二つに折りて、三つ身を裁ちし如くに眞中まで兩方よりきりわひ、その切りわひたる處より中の切れをたてに眞二つに折りて切り兩前とすべし。後身の方より衽をとるべし。此の裁ち方は切れは多くいらざれど、片面のものにては出來ず、もし片面ものならで、尺二寸巾もの丶裁ち方の如くにしてたつべし。　そは此のつぎにものし侍らん。

總計一丈八尺

（縮緬尺三寸巾本裁ものの裁方）



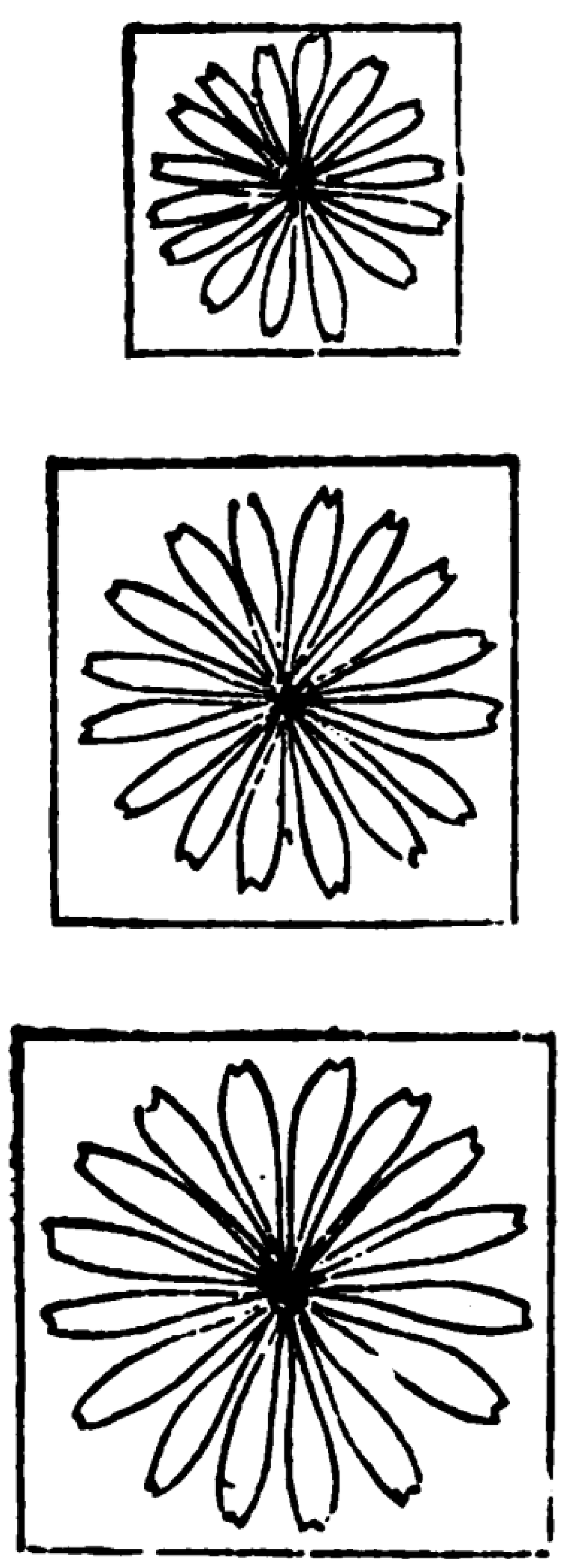
造花

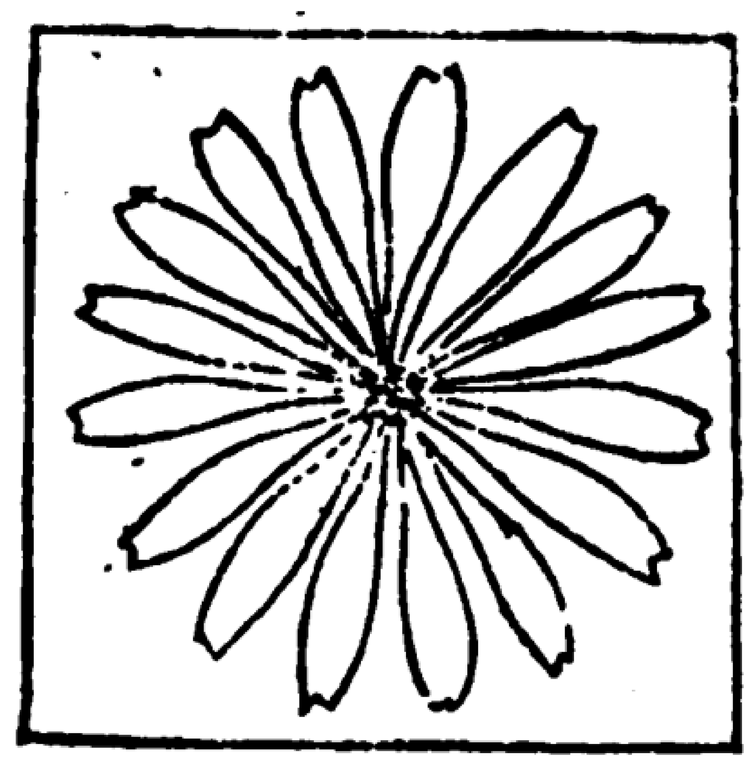
共立女子職業學校教授　伏見藤三郎

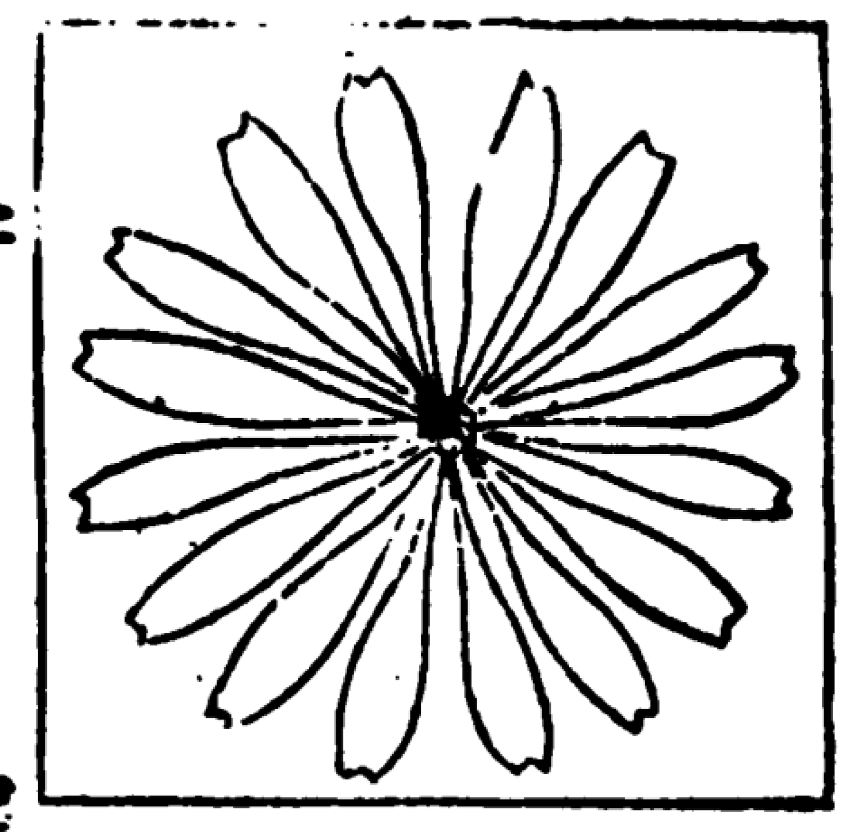
菊（つゞき）　細菊

滿開の造り法　花瓣は絖、羽二重、若くは寒冷紗にて、大さは第三十六圖の如く、其の最も大なるものは八分四方、夫より漸々に五厘つゝ少く五種につくり。瓣の小さきものは「ヲウ・ラミ」又は「フロックシン」にて中を薄くぼかし、后、瓣の數を各十六づゝに圖の如くたち、菊鏝の小にて筋を付くること前號の菊と仝じ。

第三十六圖



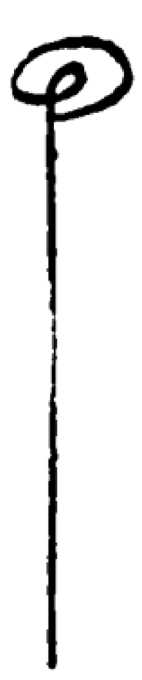




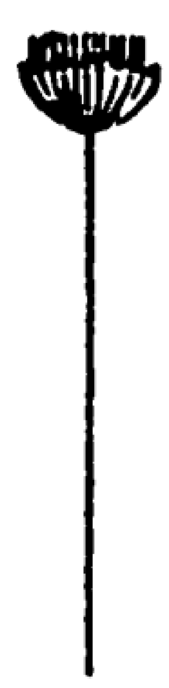
蘂は　黄色の糸を適宜の長さに斷ちたるもの凡そ四五十本を揃へて、其上を紙にて固く巻き付け、之を長さ一分位づゝに切りて用ゆ。別に第三十七圖の甲に示せる如く、針金の先を横にのの字形に巻き、前に造りたる一分ばかりのものゝ一方に糊を付けてこの上に付け、まはりに巻きたる紙とはぎとりて、下より花瓣の最も小きものにのりを付けて通し、蘂を巻き包みて乙の如くす。之に四枚の花瓣を通し、萼を付けて花となす。萼は前號の菊と全じ様にして最も小く造るなり。

第三十七圖

甲



乙



蕾、葉、莖など皆前號に示したるものと全じにして唯小く造るのみなり。

福壽草

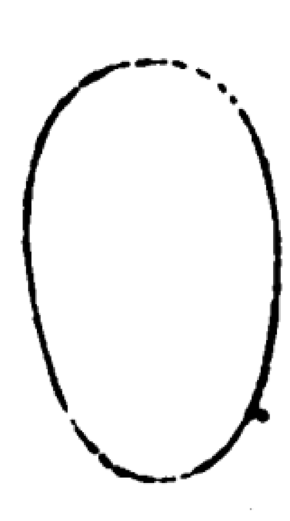
福壽草は　絖又は羽二重にて造るをよしとす、花瓣は第三十八圖の如く二種の形に甲十枚乙五枚を造り（但乙は雁皮紙にて造る）甲は「オウラミ」にて黄色に染め、乙は「オウラミ」九分に「グリン」一分を合せ

第三十八圖

甲



乙



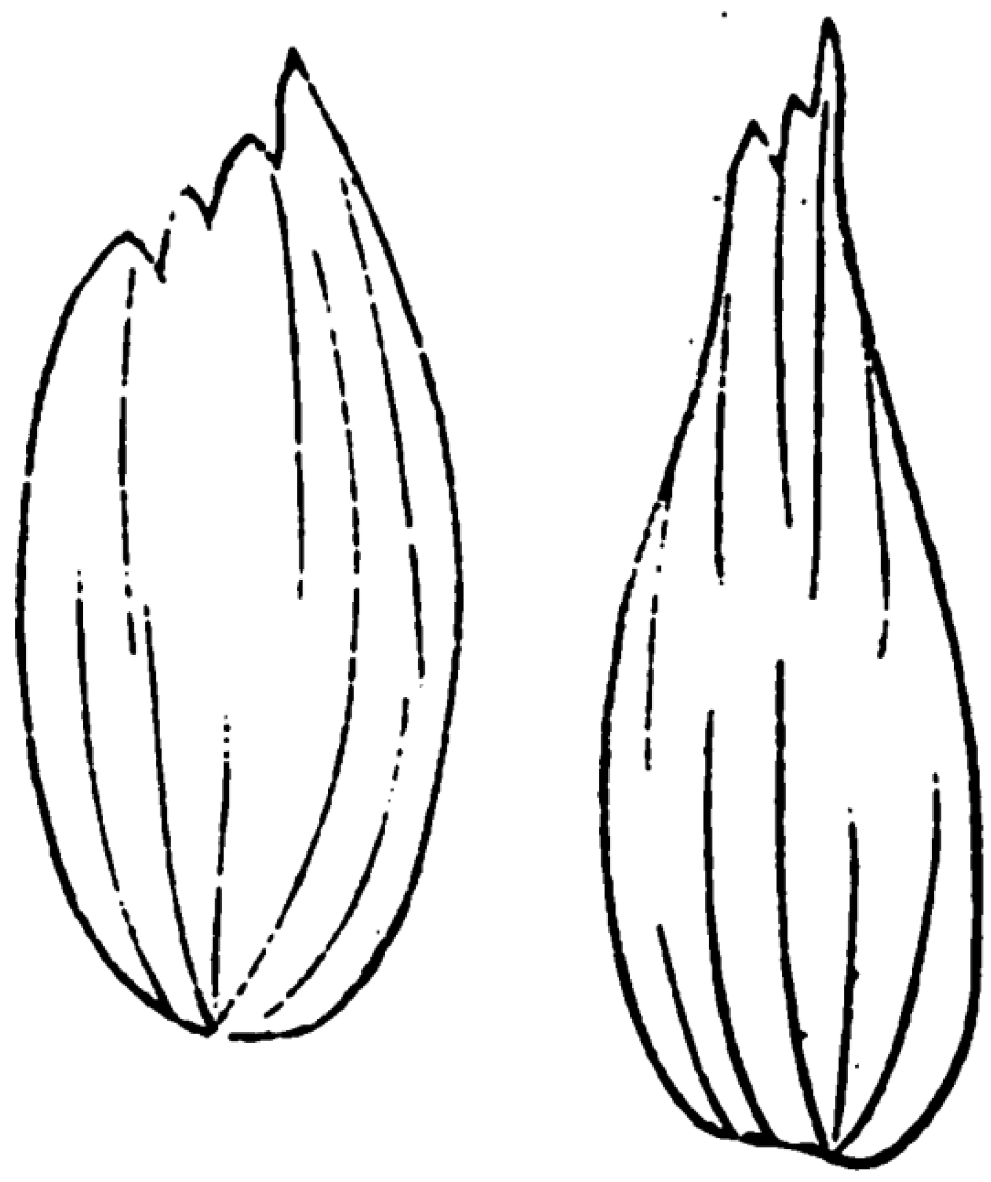
たる液にて下染し、其の上を茶粉と薄墨とにてほかしに染め、甲乙何れも菊鏝にて少しく丸みをつくべし。

萼は梅と全し様にして造り、之に甲の花瓣を五枚づゝ二列につけ、蘂も梅と全じものを造りてつけ、后乙の花瓣五枚を其の回りに付けて花を造り終ふ。葉

は、胡蘿蔔又は葱の葉の如き形をなせり、實物と見合せて適宜の大さにつくり「マセンダ」一分、「オウラミ」一六分「グリン」三分にて色染すべし。莖を包みたる葉は第三十九圖に示したる如き形に甲二枚、乙一枚を造り、色は乙の花瓣と全じ樣なる色にして、少し赤色を帶びたる處は「マセンダ」にて極く薄くぼかし、剪鏝にて丸みをつくべし。

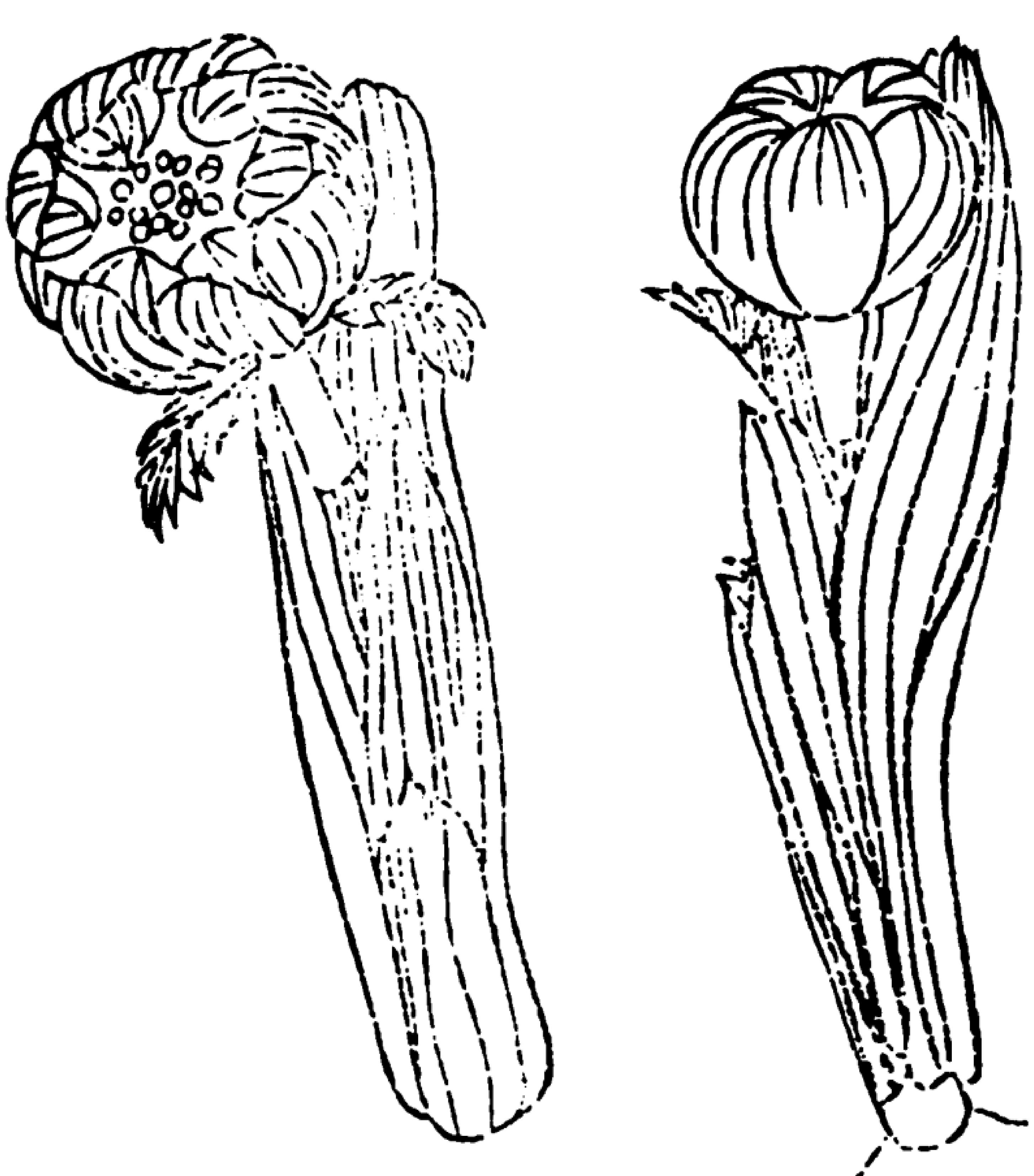
第三十九圖

甲　乙



此の如く造り置きて之を纏むるには、前に造りたる花の萼に、適宜の長さに斷ちたる針金を添へて、其の上に「マセンダ」にて薄くぼかしたる紙を莖の太さに卷き、萼の下には葉を添へて卷き付け、之れより八分ばかりの處に小許の綿を付け、其の上に前に造りたる莖葉の甲二枚を適宜の處につけ、后乙を一枚付く、第四十圖を參照すべし。

第四十圖



だいどころ

鯖の焼方

新鮮なる鯖を擇み、脊を割りて腸を去り、其頭と尾を切りて水にて能洗ひ、水氣を拭ひ、細かに刻みたる洋芹の嫩芽に、適宜の碎きたる凝油、胡椒、食鹽を能く混合せて、腹の中に投れ、二箇所程糸にて縛り、凡ろ七八分間、鉄條に載せて、むら燒のせざるやう、度々返して「返す時肉の崩れざるやう、注意すべし」之れを燒き、糸の焦げ落ちたる頃牛酪、柚子汁、及び醬汁を少しづゝ脊より注し、尚燒くこと四五分間にして皿にとり、小匙一抔の牛酪を添へて出すべし。

鷸の焼方

鷸の羽毛を去り、殘毛を燒き、腹を裂きて臟腑を去り、頭足は其儘置き、翅と足を体に附け、全身に牛酪を塗り、武火にて燒くこと十五分間の後、能程に麵包粉をふりかけ、其褐色になりたるを度とし、之れを皿に麵包粉を敷きたる上に盛り「ケレー」一合をかけて出すべし。

牡蠣の焼方

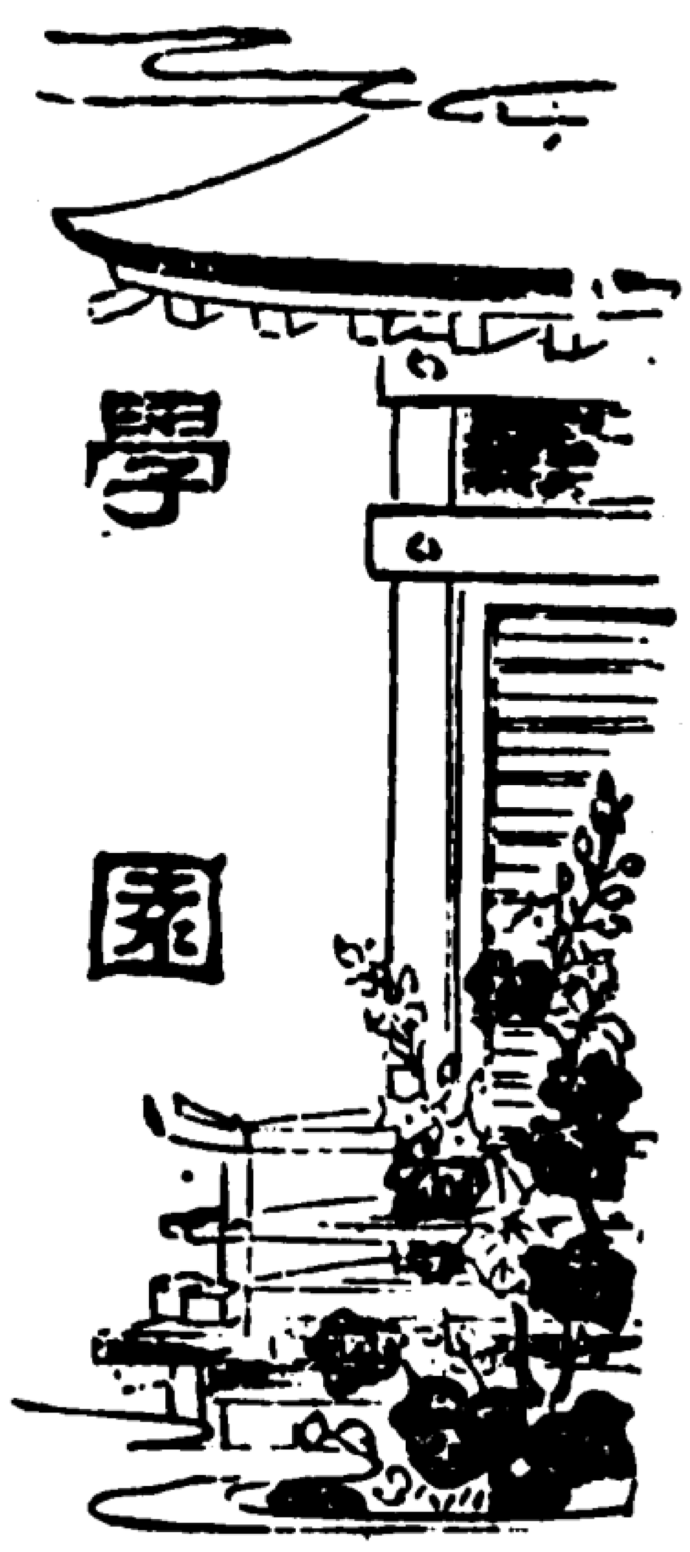
殼のまゝ能く洗ひ、水氣を乾したる後、殼の大なる方を下にして鐵條にのせ、武火にて燒き、殼の口の開きたる時を度とし、其牡蠣を殼のまゝ盆の上にとり「殼の中の液汁をこぼさぬやう注意すべし」胡椒少量をふりかけて熱きうちに出すべし。

又一法は、牡蠣を剝きて、其の殼の中に含有る液汁にて煠で、其の肉を「シチー」鍋の中にとり、此の上に能程の胡椒、食鹽、麵包粉等をふりかけ、之れに

まへの煠汁をかけ、牛酪を落し、能く蓋をなし、十分又は十四分間文火にて蒸燒にすべし。

椎茸の燒方

生椎茸の大なるものを、布巾にて鹽磨きになし、燒鍋の中に別々に投れ置き、一個毎に牛酪を落しかけ、其上に胡椒をふりかけ、十五六分間能き加減の火にて燒くべし。



日本文典（二十二）

鹽井正男

前に想像助動詞の中に述べたる「べし」といふ詞は、また斷定助動詞にも成るなり。即ち、事物動作形容を、これそれといひ定むる意をあらはすを得る詞なり。例へば、伊勢物語に、

思ふことといはでぞたゞにやみぬべき
　　われとひとしき人しなければ

或は、徒然草に、驥を學ぶは、驥のたぐひ、舜を學ぶは舜の徒なり。僞りても賢を學ぶを賢といふべし。

とある如き、或は、常にも「明日は君の家に行くべ

し。」「余と君と親友たるべし」などいふ時の「べし」なり。

されど「べし」の斷定の意は、極めて弱くして、他の斷定の助動詞なる「なり、たり」の如くに、慥かならぬけしきあり。やゝもすれど、想像の意を含めるやうになるなり。

元來「べし」は想像或は推量の意をあらはす助動詞にして、我が推量の意をあらはす語なるが故に、自ら、また、やゝ決定斷定の意をもあらはすやうになるにて、されどこそ、また決定をあらはすも、推量の意の去り難く、宛も半決定の意をあらはす如き語となるなり。なは徒然草をひもときて見られよ。かゝる推量を含みたる決定の意に用ひたるもの、いと多く見ゆ。

「べし」の活用するさまも、また、動詞につゞくさまも

前號に記したる如く、その活用するさまは、宛も形容詞の如し。而して、なは形容詞に似たる事は、形容詞は其の語根に「み」或は「ら」を添へて、例へど、「寒し」の語根「さむ」の下に「み」を添へて「寒み」といひ「清し」の「きよ」の下に「ら」を添へて「きよら」といふ如く、「べし」も其の語根「べ」の下に「み」或は「ら」を添へて「べみ」「べら」などいふ事あり。例へど、

さは山のはゝその紅葉散りぬべみ
　夜さへ見よとて照らす月かげ　（古今集）

なきとむる花しなけれど鶯も
　はてはものうく成りぬべらなり　（古今集）

花もみな散りぬる宿は行く春の

ふる里とこそなりぬべらなれ

（拾遺集）

全く同じといふにあらず、その形の似たるをいふなり。その意は「べきに」「べきやうなり」といふ意なり。

動詞に續く有樣は、前號の末に記したり、上一段活用の動詞には、まゝ終止の格の下に續くことあり。例へば

きて見べき人もあらじなわが宿の
梅の初花をりつくしてむ

つねならば、「きて見るべき」といふべきなるを、これは、略して「見べき」といひしなり。あやまてるにはあらず。

助動詞に續くには、助動詞によりて、「親友たるべし」の如きは連体の格（たる）に續き、或は「行きぬべし」といふ如き時には終止の格（ぬ）に續けり。かく助動詞によりて異れり。

四、希望助動詞

これは我が心に斯くあらばよいとか、しかあれかしとか思ふ事ある時に、その意をあらはすに用ふる助動詞にて、「たし」と「なむ」といふ二語あり。

たし。これは俗に「行きたい、見たい」などいふ時のたいといふ語にて、元來、此の俗語にいふなるタイはたしのしのイに轉りたるものなり。此のたしは、形容詞のやうに語尾を變化して、

將然	終止	連用	連体	已然
たく	たし	たく	たき	たけれ

と活用す。動詞に續くには、例へば、

賢き人と成りたし。早く起きたし。捨てたくば捨てよ。よき衣を着たし。余はいにたくもなし。

などいふ如く、皆動詞の連用の格の下に續くなり。
なほ古書の例を一二あぐれば

家にありたき木は、松、櫻。松は五葉もよし。花は一重なるがよし。（徒然草）

ありたきことは、誠しき文の道、作文和歌管絃の道云々（仝上）

なかなかに何かかたらふ時鳥
もの忘れたき夜半の一聲（拾玉集）

なむ。　これは、語尾の變化活用するさまは、

終止	連体	已然
なむ	なむ	なめ

と活くのみにて、動詞に續くには、動詞の將然の格の下に續く、例へば

人知れず思ふ心は春霞
立ち出でゝ人の目にも見えなむ。（古今集）

こひこひて逢ふ夜は今宵天の川
霧立ち渡りあけずもあらなむ。（仝上）

今年より春知り初むる櫻花
散るといふことはならはざらなむ。（仝上）

はや御馬にて二條院へおはしまさなむ、ひと騷がしく成り侍らぬほどにとて。（源氏物語）

五、命令助動詞

これは、さしづする意をあらはす助動詞にて、單に「べし」といふ語のみ。而して「べし」が命令の意をあらはすやうなりたるは、鎌倉の幕府あたりの時代よりなり。

官軍僞りて引き退かず、凶徒定めて進み出でむか。然らず、官軍を入れ替へて、內裏を

守護せさせ、火災なきやうに思慮あるべしと仰せ下されければ、云々（平治物語）

彼等を待ち調へて合戰をぞ致すべし。（保元物語）

父戀ひしくぞ、唯西に向つて、南無阿彌陀佛と唱へて、西方極樂に往生し、父御前と一つ蓮に生れ合ひ奉らむと思ふべし。（保元物語）

万の事、外にむきて、求むかべらず。たゞこゝもとを正しくすべし。淸獻公が詞に、好事を行じて、前程を問ふことなかれといへり。（徒然草）

用わりて行きたりとて、その事はてなぞ、疾く歸へるべし。（仝　上）

されど後の世に流行り出でたる口つきにて、今は、世人の、常に用ふることゝなり。「父母には孝を盡くすべし。君には忠をつくすべし。師を敬ふべし。謹んで敎へを受くべし。」など、よく人のいふ所なり。

動詞に續くには、其の終止の格の下に續く、前例を見て知るべし。

新古今和歌集講義（一）

鹽井正男

緒言

新古今和歌集は、第八十三代土御門天皇の大御代元久の二年ぞかりに、後鳥羽上皇の敕をうけたまはりて、藤原の定家、おなじく家隆、おなじく雅經、源の通具、藤原の有家たちが、其の代の古今にわたりて、廣く世にうるはしき歌どもを撰びあつめてまゐらせたる和歌集にて、やがて、世に二十一代集といへる勅撰和歌集の中の一つなりかし。

臣たちも、はやく知りたまひてならむが、世に三代集といふは、その二十一代集が中のはやき集なる

古今和歌集（醍醐天皇の御代に、敕をうけたまはりて、紀の貫之、おなじく友則、凡河内の躬恒、壬生の忠岑たちの撰びあつめしもの）

後撰集（村山天皇の御代に、敕をうけて、彼の有名なる梨壺の五人と呼ばれたる源の順、清原の元輔、大中臣の能宣、紀の時文、坂上の望城たちの撰びまゐらせたるもの）

拾遺和歌集（一條天皇の御代に、藤原の公任の撰びまゐらせしもの）

の三集を合はせて、三代集といふなり。さて、この三集に、なほそれにつぎたる

後拾遺和歌集（白河天皇の御代に、藤原の道俊が撰び奉れる敕撰集）

金葉和歌集（崇徳天皇の御代に、源の俊頼がゑらびまゐらせたる敕撰集）

詞花集（近衛天皇の御代に、藤原の顯輔の撰びたる敕撰集）

千載集（後鳥羽天皇の御代に、藤原の俊成が撰びて奉りたる敕撰集）

の四集に、この新古今和歌集を加へて、やがて、世に八代集といふなり。

敷島のやまと歌は、その上をたづぬれど、遠く千はやふる神代の昔より、いと舊くきこえ初めたるものにて、奈良の朝のわたりには、はやく萬葉の盛りをさへ見るに至りたるを、いつか吹きと吹き來にたる漢山風の烈しきに、なさけなくも吹き荒らされて、うるはしき敷島の詞の花も、いとかなしげにしぼみがちに、ゑむしはおぼつかなけに見たりしを、その

山風は、いつしかうれしくも吹きなごみゆきて、またもやさしき御國風の立ちかへり來り、しかも、時津風久しく枝も鳴らさず、浦波遠く立ちさわがず、世の中はいと長閑にて、大宮人はいとま多きに、都は山蒼く水清く、花に紅葉に月に雪にうるはしきながめは、自ら大宮人の日を暮らし夜をあかすべき友となり、さて自ら大宮人の心の花をも誘ひけむ。

また、代々の天皇をはじめ、位官高き人々も、これをめでよろこびたまひて、尊きさるべきわたりに、やんごとなき九重の御庭にさへ、歌合などいふこと行はせられて、心の花をきほひ興せられ、さては、敕撰集などの晴れなる集をさへに作らしめて、すゝめ玉ひしかば、世の中はわれもわれもと、この道にわけ入り、きほひ進みしかば、敷嶋の道は進みに進み、詞の花は咲きに咲きゆき、此の新古今集の作られしあたりは、實に此の道の盛りをきはめたる時にて、世にきこえたる名人も多く、心も詞も、花とうるはしく、月とゆかしく、にほひこぼるゝばかりなる名歌も、あまた見ゆ。

萬葉集の頃の歌は、かつ〳〵詞をも飾るやうのわざありたれど、なほいとすなほにて、たゞ思ひあたるまゝ、うかび出づるまゝを、それとうちつけにうたひ出でたるのみなりしを、古今集の頃に至りては、詞もうつくしからむことをもとめたれど、なほ心の巧みならむことをむねとせり。さるに、實に新古今集あたりの歌は、心も詞もおなじく巧みにめでたからむことを心がけよまれたり。されど、あくまでも思想を練りめぐらすと共に、また、あくまでも詞を磨き飾りたり。されど、新古今集の歌は、技術として、萬葉集のよりは遙に、古今集のよりも一層、妙

なるものとなれり。歌は、もとより繪畫彫刻音樂とおなじく、一の技術なり。うたふ心はやがて畫の趣向にて、詞はやがて畫の墨色なり。實に歌も一種の技術なり。されど、新古今集の歌は、實に、歌として、萬葉集のよりは遙に、古今集のよりも一層立ちまさりたるものなり。此の集の中のよきものに至りては、幽玄深遠にして、しかも流暢優艶、まことに巧妙をきはめ、さながら深山の花、幽谷の月を見るが如きけしきをおぼゆ。まゝあまりに其の口つき巧みをきはめむとして、さながら謎かけたらむ如きものあるを以て、世の人の此の集をあしざまにいふ人あれど、それもて、皆ながらをいひ落すは、心なき人のもの知らぬ業なりかし。

此の集の歌人の名高き者は、先づ定家家隆の二卿より通具、雅經、有家などの五人の撰者はいはずもあれ、その他には、後鳥羽天皇、藤原の良經、藤原の俊成など、女流には式子内親王、宮内卿、俊成の女などゆかしきものにて、佛徒には西行法師、大僧正慈圓などの歌多く、なほ其の他にも上手も名人も多かり。

此の集の歌は、さばかり幽遠なるが故に、自ら解き云ひ難きにや、古より此の集を注せる書少く、僅に本居宣長翁の記されたる「美濃の家づと」といふ書あり。またその翁の説を石原正明ぬしの論ひゆきたる「尾張の家づと」といふものあり。されど、翁の書も新古今の歌を彼れ此れと引き拔きゆきて注せるものにて、集中の歌を皆ながら解き置かれたるにあらず、且ついと大略の論ひにて、さのみ頼むべき書にはあらねど、いとまあらば讀みたまふもよからむかし。



漫錄

東海紀行（承前）

故人　井上通女遺稿

二十七日、曉、いで行く。けふは、潮見坂とて、遠江のなだなどみゆる、いとおもしろき所を過ぐるなどいふめれど、物へだゝりたれど、いと、よくも見わかず。高師山、濱名の橋など、音に聞きつる、こゝもとにやと、おぼつかなきものから、誰にかは問はん。未の時ばかり、あら井に、やどかりて、難波にて給りし御印、關所に奉りしに、わきわきたるを、少女と書きわくべき事を、えしらで、たゞ、女とのみ書きて奉り、さて、御印のことにも、女とのみ有りければ、ゆるし給はで、むなしく、もとの宿に歸りぬ。いと悲しく、つらくて、いかで、さる事知らざりけんと、我が身さへうらめしくて、

たびごろも荒井の關を越ゑかねて
そでによる浪身をぞうらむる

身經萬里走君命　今日已來荒井關
未識少長因袖分　空留旅館我心難

いそぎ、使したてゝ、御印取りかへ給らんと、難波へいひやる、爰に、みな〳〵、止りて待つ程、心もとなきこと、數しらず。我がこし方をおもふにも、さかしき道も多かりき。かの使、いかに、恐しき目

にや逢ふらん。安らかに、いつか歸りこんなど、まづ心なく、思ひつゝけらる。もし、事違ひて、是より歸りなど、いかに、うからまし。はる〴〵こし甲斐もなくやなりなんと思ひつゝくれど、そゞろに、涙落ちて、燈さへ暗く覺ゆるに、雨、いと、いみじうふりて、よろづ、物わびしさ、いはんかたなし。大路も、ほどなけれど、五更より、旅人、うちむれ行く音して、かれこれよびかはし、馬の、いと、たからかにいなゝえて、くつはづらの音など聞ゑたる、うら山しく、たゞ、何につけても、女の身の、さはり多く、墓なき事ども、今さら、取り集めて過ぐすほどに、明暮も思ひわかず。かくて、幾日經ぬるもしらず。けふは、師走の三日に成りぬといふ。いと、よく晴れて、鮮なる日の影、さうじに映りたるを見て、かゝるをり、道ゆかどよかるべきに、心ならぬ宿りかなどいふ折ふし、使かへり來れり。いとゞはやかりしなど、口々に云ふ聲す。とく出で見よといふほども、心元なしや。かぎりなく嬉しき物から、猶、いかならんと、胸うちつぶれて、文箱明けたるに、些のとがめもなく、よく書きて給れり。かゝるくるしみ、ればしやりたるかやと、そなたにむかひて喜ぶ。扨、奉りたれど、此の度は、違ふ所なけれど、とく〳〵とゆるさる。いとうれしくて、此の程、思ひ暮らしぬる心、ひらけたる心地して、急ぎ、舟に乗りぬ。風も荒けれど、近きわたりなれど、何とも思はず。舟より上りて、今宵、はま松に宿りぬ。猶、今朝の事いひて悦ぶ。此ほどの事ども、とりどりいひあへり。

いさめしを袖には深くうちよする
浪にこたふるはままつのかせ

彼の定家卿の「袖にふけさぞなたびねの夢も見し」といへるを、ふと思ひ出でゝ、かくいへり。四月、五更に出でゝ、明けはなるゝほどに、天龍の川舟にて渡る。それより、しはぶきやみにかゝりて、ものかくこと、父の、いさめけれど、筆もとらずなりぬ。

（をはり）

またぬ青葉

故人　香川景樹

四月一日。かの禪師に白衣のひとへを調じまゐらす。おもふ心ありて、

墨染もなほ世の中の色なれど
うつろふならひありとこそきけ

となんよみそへたる。今日もながめをり、

日數にてとほざかるだにかなしきを
春さへ夏にかはりけるかな

玄如、

なき人ときゝつるものゝあやしきは
なほ目の前に見ゆるなりけり

友なる慧岳法師、今日晝すぎてとぶらへり。さていはく、さきつ年人につかはしたる子の、俄にやまひし侍りて、この六日許さきの日うせ侍りぬ。今年六になんなりぬる。名をこひまゐらせて、呉松とつけくだされし子なり。やがて死なんとする前にも來りて、いとにくき口などきゝのゝしりて、かへり侍りしがなど、ゆくりなく語り出づるに、おもひかけぬ淚しどろに落つ。松と名づけしは何の甲斐ぞ。七とせにだに足らざるをや。

今日あけてくれまつはどのよの中を
千歳までもとなにおもひけん

二日。今日はかの禪師と共に詣づ、

後の世をかけたる友のしたしさは
苔のしたにも嬉しとおもはん

このせじは、俗なる時のいとわかきより、子にひとしうはぐゝみならし、世にありつるかぎり、あつかひものして、雲水のゆくへ定めなき年月も、立かへりては隔なくまじらひかはし、後の世ざまのこゝろざせなど、大方はこのだい德のしるべなりけれぞや、彼の辭世の歌よみける日しも、うちあふちぎりあめるには、この世さきの世淺からぬちなみなりけり。されど此度も、山のろなたまで、ふりはへてむかへしはや。

大原やおぼろのしみづ朧氣の
契にはあらずとほき世までに

夕暮嵯峨の藏光庵なる周虔法師とひ來り、つれづれと趺座せし様を見て、よみ出せり、

よもすがらおもひつゞけて待ちもせぬ
山ほとゝぎすひとり聞くらん

今宵三七日のたい夜なり。例の岡崎へゆきて、手向の歌よまんとす。たゞならんよりはとて、

あめふれどいざゆきて見ん山櫻
風さへ吹かど明日は散るらん

といへるなき人の歌の言葉を取る。こは二月のはじめ、雨ふりしめりて、いともさびしき日、雨中の花といふ題を出して、かたはらによみけるを、われもよまんずとて苦しきをねんじてかい出せし歌なれど、其句をわかてるなり。

あめふれど　玄如

雨ふれどとまりもやらずしでの山
ひとりや君がこゑて行くらん

いざゆきて見ん　　もとのぶ

かの寺のたかむら如何にあふぐらん
　吹く風あらしいざゆきて見ん

山櫻　　あきら

山さくらちりのまがひにかくれても
　ねにかへりけん君をしぞおもふ

風さへ吹かで　　なほよし

かねて君おもひうかべし蓮葉に
　風さへ吹かで如何にすゞしき

明日は散るらん　　あるじ

亂れても明日は散るらん玉の緒の
　すゑながしともおもひけるかな

三日。野川の渡いつも蝶多し。今日は殊更なり。花ある所にのみいそがはしう飛暮らし、如何に勞れてあしたの露ともおきず、日たくるまでに眠居り、世の中の愁といふもの、ふつに知らぬにやあらん。いとにくきまでこそ羨ましけれ。ゆふ〳〵其こゝろをよまんとするに、とゝのはらねばかゝず。

四日。今日も岡崎に居り、武者の小路少將の君公隆朝臣おもはずに入れはせり。むぐらの外にけがれたるこのごろの宿を、如何は見給へるかも、打ひろげてすゑまゐらするかしこさしくものなし。さて例の甲斐なき世の樣など、おくこゝろなく語らひ奉るほど、

きえはてぬ後の契もありときく
　さなはかなみそかりの世の露

と、よみ出で給ひけるを、いとかなしくうけたまはりて、

うつせみのこの世のまゝにあらばこそ
　後の契もうれしかるらめ

かはりはてゝ黃金しろかねおでぞかなならん。さうで

んの世界も、かねては願ひしもの丶、今はなか〳〵罪深きしなど丶ろにれちいり侍りてなど申す。夕つ方俄に雨ふり、霰さへふりまじりて、風すさまじく吹く。詣で丶見るに、竹葉ちり亂り、例の板やしどゞにぬれたる樣いとかなし、

かきはらふ袖ももとよりしぶきにて
　板葺いと丶ぬれまさりけり

大空もかりそめぶきのかりのやに
　住めでわりともれもひけるかな

井蛙小錄

井上頼文

吹革祭

瀧澤解（馬琴）

霜月八日の吹革祭は、みやこ智恩寺の元加茂明神よりはじまりて、三十九世滿譽和尙、稻荷八幡のふた神を加へ給ふ。よて世に稻荷のはたけ祭といへり。都にはこの月朔日より廿五日まで、かた〳〵の御やしろにこの御祭り行はるれど、あづまにはたえて聞けることさへなきを、いつの頃よりか、鍛冶、いもぢ、いしのたくみ、すべて吹革もて世の渡らひとせるもの丶家にはこのことなしつるになん。そはまつりに名をれほせて、またくわらはべの遊びぐさなめり。ろの祭いかにすと云ふに、八日のあしたまだほのくらきより、をさなきもの丶かぎりつどひ來て、かぢがびんぼふと、はうしとりさへづりのるめり。この祭せる家のなほとめるもあべいに、などてかくいやしめのるにやあらん。はた鍛冶にもあらぬ、いしのたくみをもみなれなしでちして、かぢとのみのりぬるぞいわけなきもの丶かたくなにひがればねたる。い

をかしきや。やゝあけ行くころは軒におきける朝霜のましろにして、いらかはさゝ波のごとくみえたる二かいのさうじ引あけて、あるじあながまやとつぶやきつゝ、柑子をいくつともなくうちかくれど、みなむらだちあさりてきそひかつけり。こゝろとき兄は、弟をおひながら、人の上にまろびたるにあひておのがかしらにおちかゝれるかうじをすだきあはてゝうけえたるは、こがねひろへるこゝちやすらん。かゝるちはひはありながら、せまき袂のはつれやしけん、三つ四つふたつはろ／＼とこぼれかゝれるをかしこの人にうばゝるゝもありけり。かの橘をふところにせしにはことかへて、いとさがにくし。とかくする程に、いつしかくだもの、數つきたりと見えて、かうしのこのうつばなるをひとつふたつ投げおろしつゝ、さうじとぢてあるじのつと入りたれど、わらはべはなほあかずや有りけん、かづけものゝおほからぬをあざむきつ。いよゝびんばふとのりどよみて、のこれる門もらすまじと、となれる町にざれむみてはしりゆきぬ。

雨月物語（つゞき）

故人　上田秋成

淺茅が宿

下總の國葛飾郡眞間の郷に、勝四郎といふ男ありけり。祖父より舊しくこゝに住み、田畠あまた主づきて家豐に暮しけるが、生長て物にかゝはらぬ性より農作をうたてき物に厭ひけるまゝに、はた家貧しくなりにけり。さるほどに親族おほくにも疎じられけるを、口をしきことに思ひしみて、いかにもして家を興しなんものをと左右にはかりける。其頃雀部

の曾次といふ人、足利染の絹を交易するために、年〳〵京よりくだりけるが、此郷に氏族のありけるを屢來訪らひしかど、かねてより親しかりけるまゝに商人となりて京にまうのぼらんことを頼みしに、雀部いとやすく肯かひて、いつの頃はまかるべしと聞ゑける。他かたのもしきをよろこひて、殘る田をも販りつくして金に代へ、絹素あまた買積て、京にゆく日をもよほしける。勝四郎が妻宮木なるものは、人の目とむるばかりの容に、心ばへも愚ならずありけり。此度勝四郎が商物買て京にゆくといふをうたてきことに思ひ、言をつくして諫むれども、常の心のはやりたるにせんかたなく、梓弓末のたづきの心ぼそきにも、かひ〳〵しく調らへて、其夜はさりがたき別をかたり、かくてはたのみなき女心の、野にも山にも惑ふばかり、物うきかぎりに侍り、朝に夕べにわすれ給はで、速く歸り給へ。命だにとは思ふものゝ、明をたのまれぬ世のことわりは、武き御心にもあはれみ給へといふに。いかで浮木に乘りつもしらぬ國に長居せん。葛のうら葉のかへるは此の秋なるべし、心づよく待ち給へといひなぐさめて、夜も明ぬるに、鳥が啼東を立出て京の方へ急ぎけり。此年亨德の夏、鎌倉の御所成氏朝臣、管領の上杉と御中放て、舘兵火に跡なく滅ければ、御所は總州の御味方へ落させ給ふより、關の東忽ちに亂れて、心〳〵の世の中となりしほどに。老たるは山に逃竄れ弱きは軍民にもよほされ、けふは此所を燒はらふ、明は敵のよせ來るぞと、女わらべ等は東西に逃まどひて泣かなしむ。勝四郎が妻なるものも、いづちへも遁れんものをと思ひしかど。此秋を待と聞ねし夫の言を頼みつゝも、安からぬ心に日をかぞへて暮しけ

る。秋にもなりしかど風の便もあらねど、世と丶もに憑みなき人心かなと、恨みかなしみおもひくづをれて

身のうさは人しも告げしあふ坂の
夕づけ鳥よ秋も暮れぬと

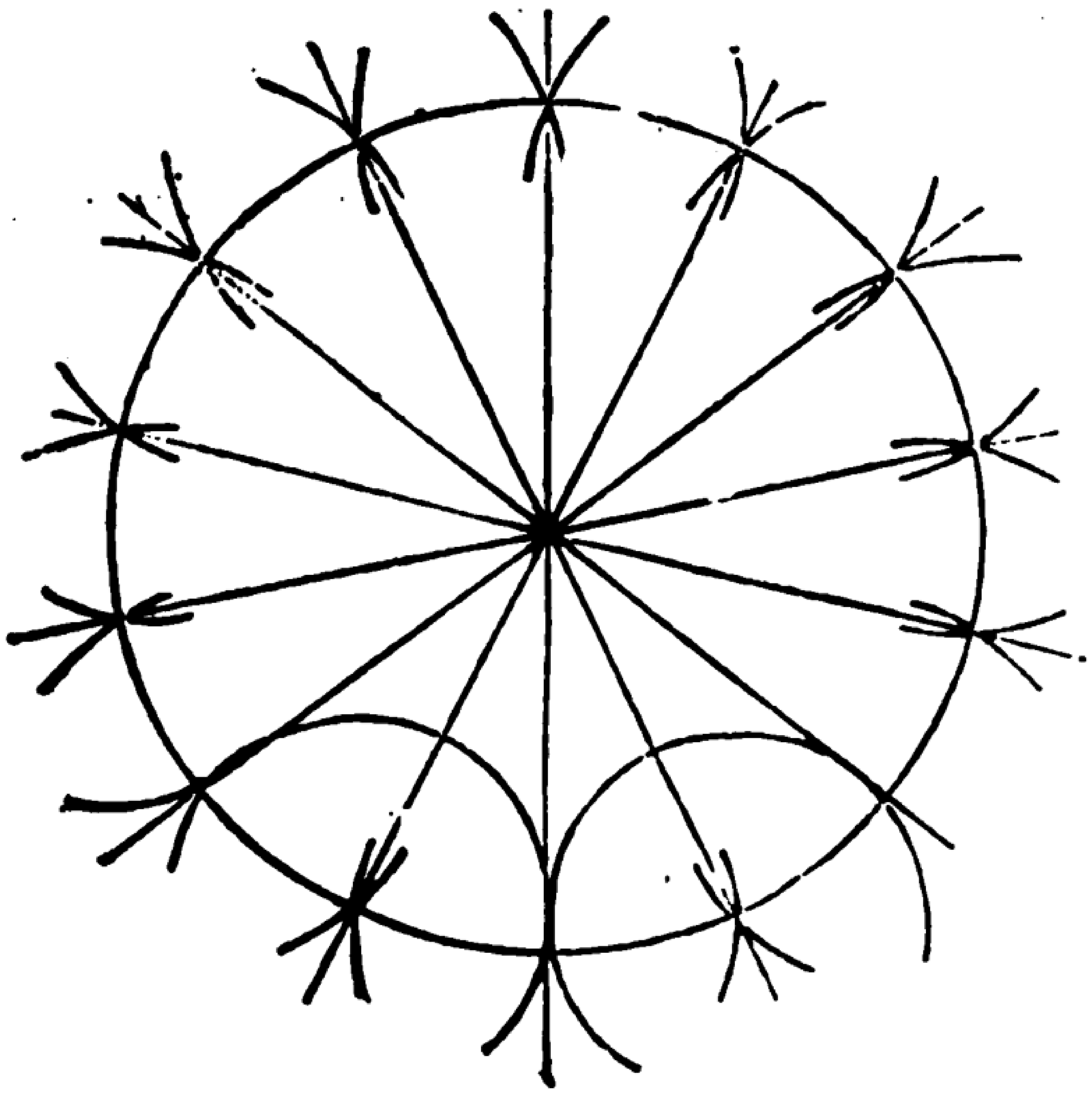
かくよめれども、國あまた隔てぬれどいひおくるべき傳もなし。世の中騒がしきにつれて、人の心も恐しくなりにたり。適とぶらふ人も、宮木がかたちの愛たきを見ては、さま〴〵にすかしいざなへども、三貞の賢き操を守りてつらくもてなし、後は戸を閉て見ゑざりけり。一人の婢女も去りて、すこしの貯へもむなしく、其年も暮ぬ。年あらたまりぬれども猶をさまらず。あまさへ去年の秋京家の下知として、美濃の國郡上の主、東の下野守常縁に御旗を給ひて下野の領所にくだり、氏族千葉の實胤とはかりて責るにより、御所方も固く守りて拒ぎ戰ひけるほどに、いつ果べきとも見えず。野伏等はこ丶かしこに寨をかまへ、火を放ちて財を奪ふ。八州すべて安き所もなく、淺ましき世の費なりけり。勝四郎は雀部に從ひて京にゆき、絹ども殘りなく交易せしほどに、當時都は花美を好む節なれど、よき德とりて東に歸る用意をなすに、今度上杉の兵鎌倉の御所を陷し、なほ御跡をしたふて責討たど、古郷の邊りは干戈みち〳〵て、涿鹿の岐となりしよしをいひはやす。まのあたりなるさへ僞れほき世說なるを、ましてしろ雲の八重に隔たりし國なれど、心も心ならず。八月のはじめ京をたち出て、岐曾の眞坂を日くらしに踰ゑけるに、落草ども道を塞へて、行李も殘りなく奪はれしがうへに、人のかたるを聞けど、是より東の方は所〳〵に新關を居て、旅客の往來をだに宥さゞる

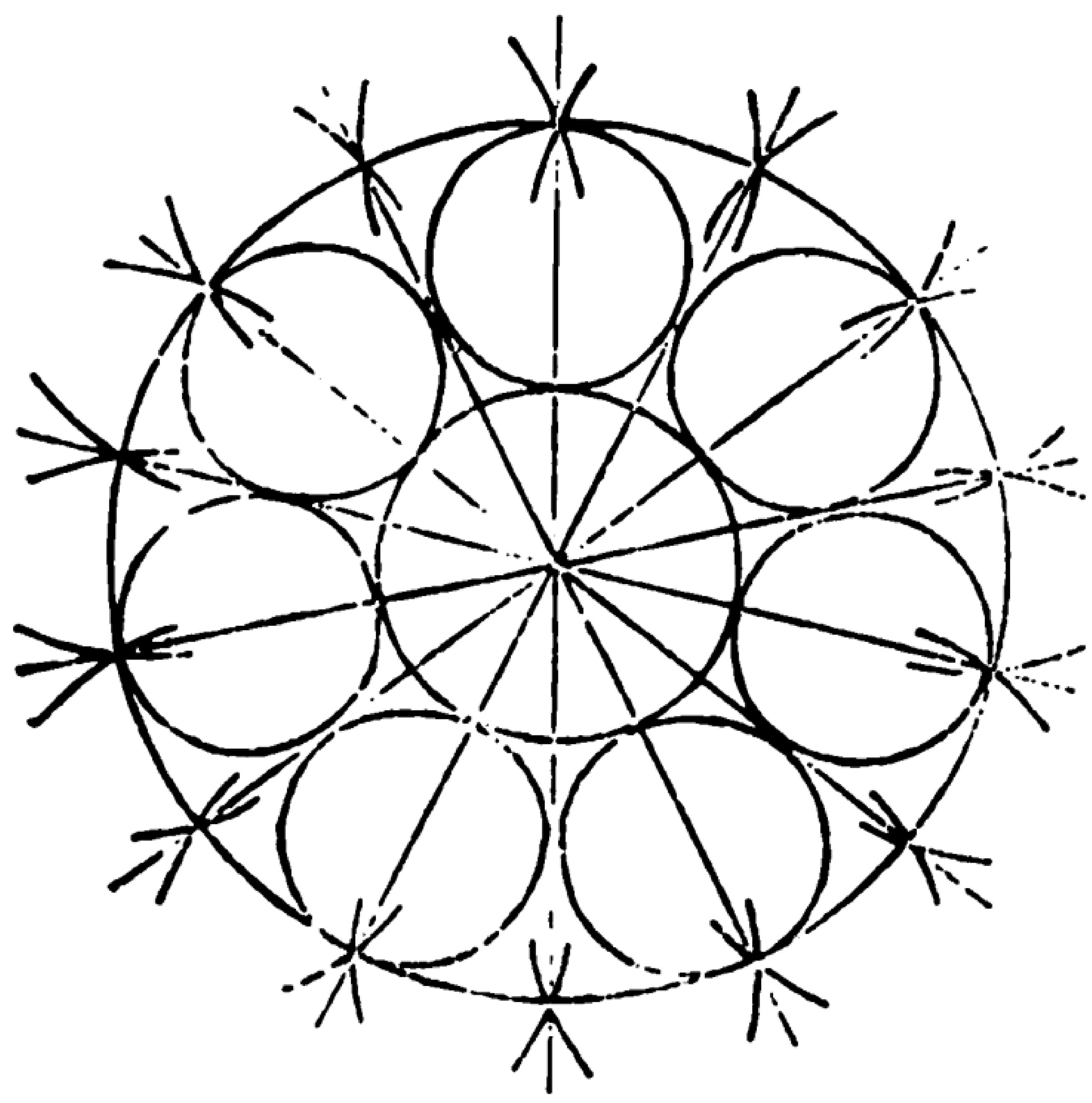
よし。さては消息をすべきたづきもなし、家も兵火にや亡びなん。妻も世に生てあらじ。しからぞ古郷とても鬼のすむ所なりとて、こゝより又京に引きかへすに。近江の國に入りて、にはかにこゝちあしく熱き病を憂ふ。武佐といふ所に、兒玉嘉兵衛とて富貴の人あり、是は雀部が妻の產所なりけれど懇にたのみけるに、此人見捨ずしていたはりつも、醫をむかへて藥の事計らなりし。やゝこゝち清しくなりぬれど、篤き恩をかたじけなうす。されど歩む事はまだはかゞかしからねど、今年は思ひがけずもこゝに春を迎ふるに、いつのほどか此里にも友をもとめて採さるに直き志を賞せられて、兒玉をはじめ誰々も賴もしく交りけり。此後は京に出で雀部をとふらひ、又は遠江に歸りて兒玉に身を托せ、七とせがほどは夢のごとくに過しぬ。寛正二年、畿内河内の國に畠山が同根の爭ひ果さゞれど、京ちかくも騷がしきに、春の頃より瘟疫さかんに行はれて、屍は衢に疊み、人の心も今や一劫の盡るならんと、はかなきかぎりを悲しみける。勝四郎熟思ふに、かく落魄てなす事もなき身の何をたのみとて、遠き國に逗まり、由緣なき人の惠みをうけて、いつまで生べき命なるぞ、古郷に捨し人の消息をだにしらで、萱草おひぬる野方に長々しき年月を過しけるは、信なき己が心なりける物を、たとへ泉下の人となりて、ありつる世にはあらずとも、其あとをももとめて壠をも築くべけれど。人々に志を告げて、五月雨のはれ間に手をわかちて、十日あまりを經て古郷に歸り着ぬ。

紋帳圖式綱目（七）

井上頼文寄贈

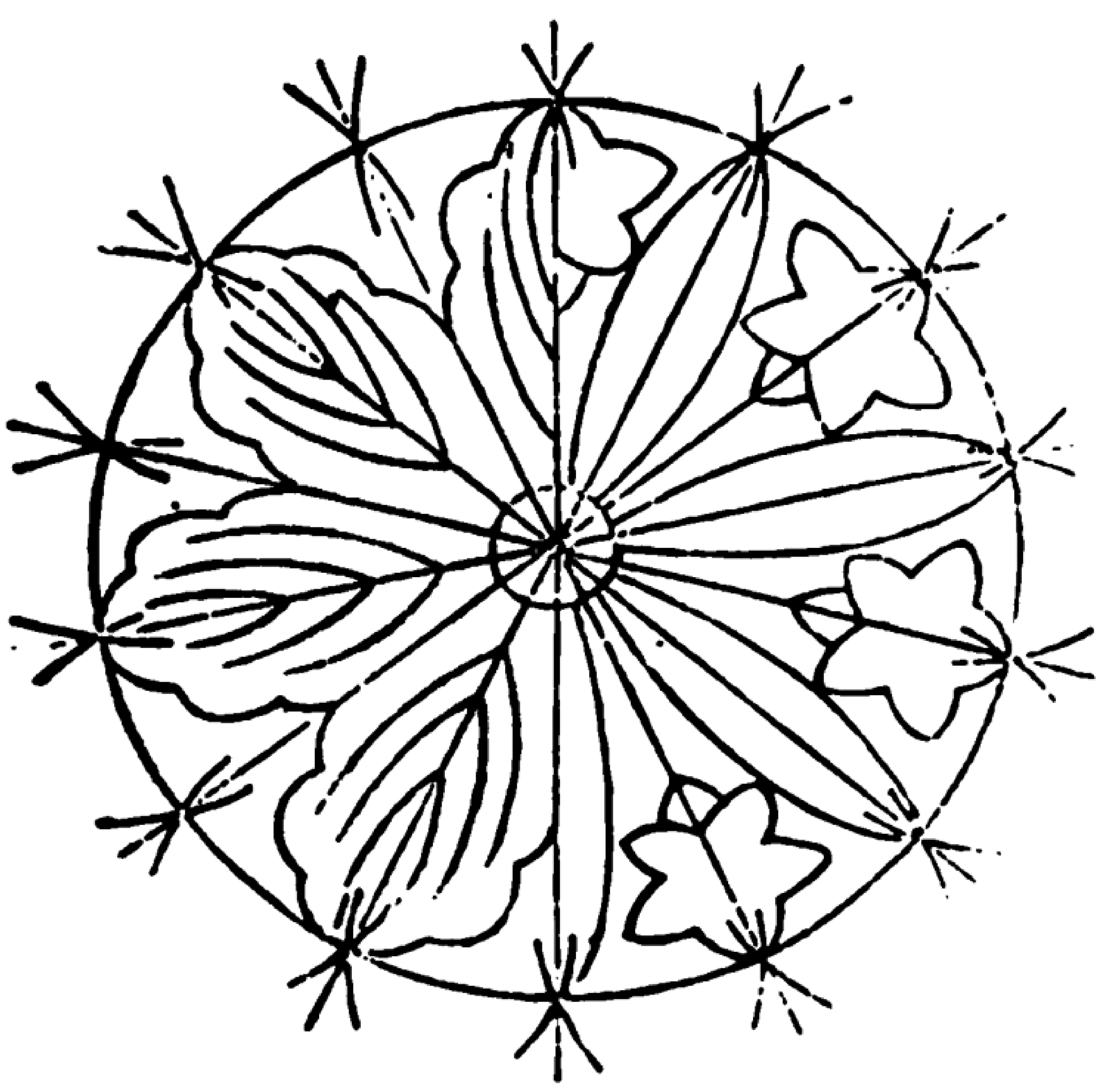
七ツ物　但十四の割





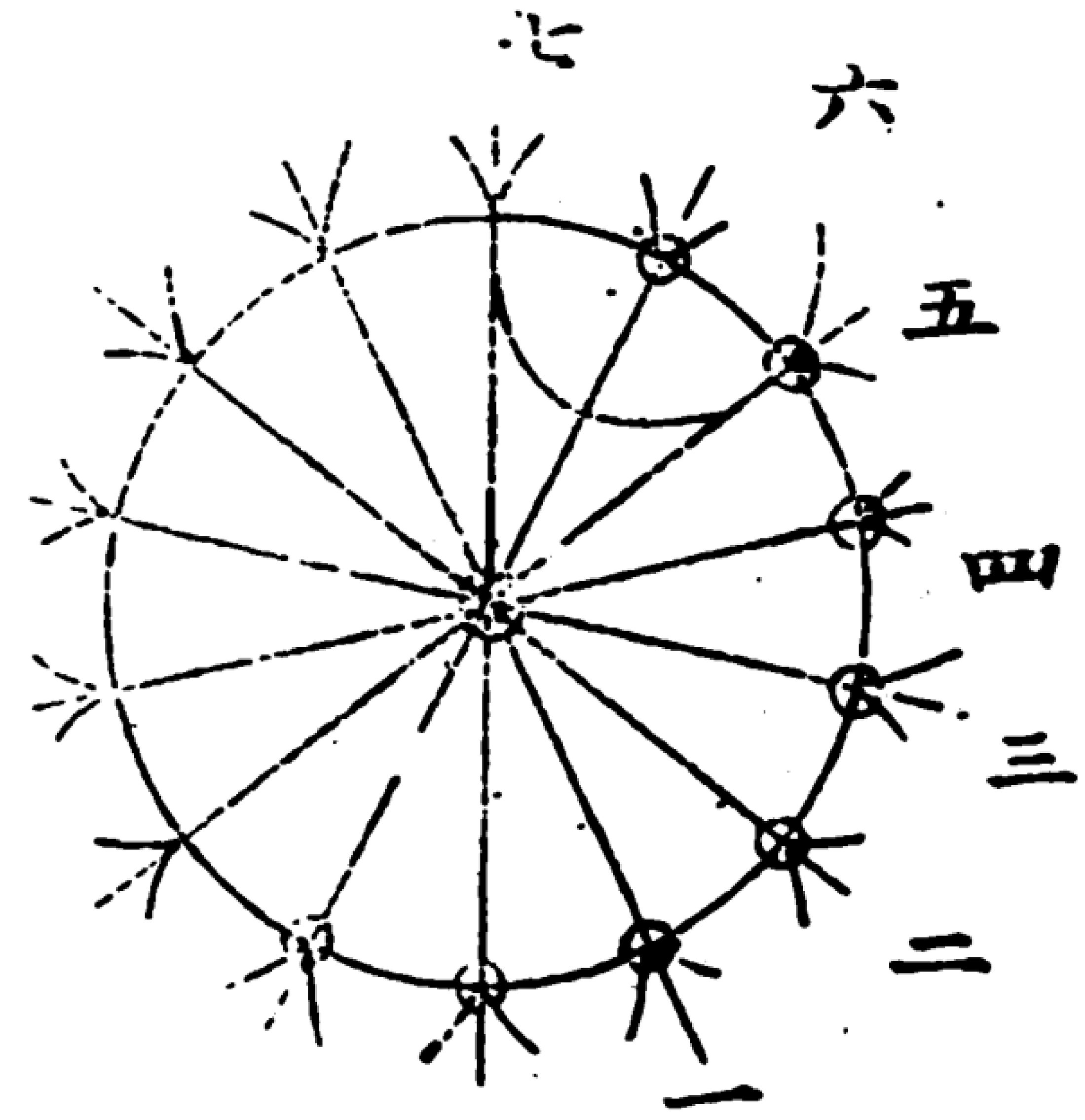
八よう

りんだうぐるま



七つかしは

右の割は圖の如きなり。但五ッの割に同じ、下より一二三四五六七と、かたはしよりよみわるべし
兩方にて十四としるなり
但割方如此



列女

橘の家主人

橘逸勢女

苔の衣雪解の水にすゝぎても
たもとゆたかにひるひまぞなき

名を妙女といひて、いみじき孝女なりけり。父逸勢は、仁明天皇の承和九年、伴健岑の謀反にかゝづらひたりとて、召もとられ、嚴しくせめとはれつれど、身にればねぬことゝて、服せざりしかど、死をゆるして、伊豆の國にながされぬ。かくときゝし女は、悲しさいはむかたなく、たゞ一人して、其あとに從ひけるに、監送のものども叱りて、從ふことを許さずなりぬ。されど、なほ止まるべくもあらず、晝は伏して、夜はたどりゆきけり。かくて、遠江國板築の驛にて、年老たるに、拷問のきびしかりしと、長き旅路の勞とによりて、病れてり、父は俄かにあへなくなりぬ。女はかなしさいはむかたなく、其亡體を葬りし傍に庵をむすび、髪を剃りて尼となり自ら名を妙冲と改め、(或は曰く幼冲)朝夕のとむらひ怠ることなく、十年の長きに及びぬ。文德天皇御位につかせ給ひて、正五位下、亞で從四位下を追贈せられ、都にかへり葬ることをゆるされけれど、い

たくよろこび、自ら棺を負ひて、京に入りぬ。時の人感嘆せざるものなかりしとぞ。

今おもふに、孝の徳ばかり世に尊きはあらじ。百敷の大宮人の家に生れ、月花を友として樂しみくらしたる身にして、一朝かゝる風雲の逆境にたちいりたらむには、たゞたゞ入りて、何事の施すべき道もしらず、泣まどふべきを、凛々しく思ひ定むること、ますら男も及ばぬ處あり。深山べの賤の女なりとも、荒磯わの海人少女なりとも、なは忍び難きを、歩みもなれぬ徒路をたどりつゝ、しかも供を召連るべきにもあらず。さるのみか、叱られつゝも從ひて、父の先途を見とゞけ、まして十年の長き月日を、たゞ一日の如く仕奉りて、生けらむ人に對ふが如きをや。さてもこの女なかりせば、父の無實の罪もあらはれじ。贈位にもあづからじ。まして兄弟に姓を賜ふが如き大御惠にあづからむやは。あはれ誠心の至れるところには、天地も動き、鬼神も泣かむ。まして苔の下なる父は、むすぼゝれしみ雪の春におひたらむが如く、打とけていかにうれしく、永き眠につきけむ。今の世泰西の文明を説きて、父母には孝をつくすべき義務なしとはこらひいふなる女子は、そも何とかいふらむ。生れ來つるわが大御國のうまし國風を野蠻といひて、自ら耻ぢざるその女子等には、妙女がこの歌の末の雫の一滴をもくませまほし。

阿部照田姫

難波がた波路わけつゝゆく船の
雲井はるけく人は見ゆめり

照田姫は津の國天王寺のほとりに住み、父を阿部眞鹿といふ。母は三才の時世を去りければ、父は後妻

を入れて、また二人の子を成しゝかど、まゝしき母はいたく姫を憎み、父の目をぬすみていと酷かりけり。まして姫はかたちのすぐれて美しかりけれど、ねたみすぐれていみじく、松の葉を焚きていぶし苦しめたる上に、讒をかまへて山に捨てむとはかれり父はこを人にきゝしりて、怒ることひとかたならずとく出行けと追はむとしけるに、姫は泣きて弟妹のことなどいひ、さまぐ\になだめて、遂に事なきを得つ。その十五歳の夏、田を植ゑてありし折、時の大臣何がしの君の天王寺に詣で給ひけるにぞ御車の内よりみそなはして、父に乞ひ同じ車に乗せて、都にゐてゆきけり。後父をもめしのぼせて、幸多き身となりけりとぞ。

今おもふに、孝の徳ばかり世に尊きはあらじ。照田姫、名こそ事々しけれ、自ら田に下立ちてうゑぬといへど、固よりさる貴き人にも、物しれる際にもあらじ。さるを、かの唐土の何がしといふ賢人の如く、継母の苛責をつゆ恨みず、中々によく従ひけるこそいはむかたなけれ。今の世のわかき少女等の中には、まゝしき母などには物もいはせず。嫂などにはつらくあたりて、人を人とも思ひたらぬがありとぞ。さては小姑とていたく嫌ふ人もあるなり。さるを継母のさばかりつらかりしにもなほよく従ひ、父の追出さんとするにもその弟妹をかなしびて、とゞめたる友の心はやがて孝の心、その孝の心はさすがにふかく身にしみて、まゝしき母のねぢけ心も自ら改りけむ。いかに顔ばせ美はしとて、賤の女のさる貴人に召さるべき。思ふに此事早くやんごとなきわたりにもきこえて、かの寺参にことよせゐてゆきて對の君とは

忘れりけむ。そのために父の名をあらはすやうにもなりて、安らかに世を終ふることを得せしめつるは、思はずして至れるもの、孝の德といはざるべからず。かくてもなほ生さかしき洋風をかつぎ出して、わが國の美風をいひそせんとするか。

因云、本稿これまで列女百人一首としたりしを、いかにしてもふさはしからずと思へるにより、本號より烈女とあらたむることゝしつ、見む人こを諒してよ。

秋のくさ／＼　　青苔

さる文會にわれは下の二題を得たり、よりて初題を野中至氏に擬へ、次題を全千代子の君に擬へてものしぬ、われはかの人等の如き事業家に對けて、文の添はざることを耻づ。

秋日山行

庭の木葉は霜に染みて、紅の色ふかうなりぬ。風雅男は遠く栂尾高雄といそぐもあれど、近く瀧の川、海晏寺と思ひたつもあるべし。いでわれも秋のあはれをもとむべきか。

あはれいかでさる暇あらむ。霜をふみて堅氷至るときく。時は來れり、時はせまれり。

枯木漸く山に多からむ。そをとらむために登る老父。猪鹿漸く谷を出でむ、そをからむためにねらひよる獵夫。各わが思ふ所を盡さむとするが如し。

物しらぬきはにてもなほかゝり、思へべわが志をたてしはそも／＼いつのことなりけむ、數ふれどを指も足らざらむ。さてもはしめで其の片はしを行ふことを得たりしは、漸く去年の今日此頃。

金石もとほるべきわが魂と、われ自ら疑はず、思ひたちてのぼりしは、わが日本の鎮として神と仰ぐ富士の高嶺。白雲もいゆきはゞかり、飛ぶ鳥も飛びものぼらぬ其巓。

劒の峯はそのいと高き處、六月の十五日にも溶けず消えず、神代ながらに殘れる白雪、風さむき秋やその高さいかに、氣氷る冬や其のふかさいかに、是れわが國ひらけてより思ひ憚る處、さてこそ夏にても登らむと試みるもの稀なりしか。

われはのぼらむその秋の日に、われは越えなむその冬の日を、氣象をうかゞふにはたよりよし、測候所をたてゝわれ自ら當らむ。

あゝ思へどいひがひなし、われそれにあたりて、氷に閉ちられ雪におほはれ、身はふくだみて血あえむとす。あゝいひがひなしとな笑ひそ、われは身をすてゝわが志のとほらむことを願へり。わが志の成らむにはわが身失せぬとも天下後世わが志をつぐものあらむ。さては區々たるこの身、氷とともにとけぬとも、雪とともに消えぬとも。

あゝ思へど憤ろし、わが身の恙あること氣象台にきこえ、遂にわが友和田技師をして、とく下れと官命あり。身病の床にありて苦しさたへがたかりしかど、吾はいかにしても下らじとすまふ、許されず。遂になく〳〵人の脊におはれて下りぬ。くちをし涙は袖にたぎちて、氷と共にむすぼゝれぬ。

ろも早く去年となりぬ。されどわが志は、遂に曲ぐべからず、折るべからず。成らざることにあらず、成るべきことなるをや。いでことしはいかにしてもわが志を果さむ。いでやのぼらむ、上りてわが國の學の譽をその巓と高くあげてむ、とつ國人も仰ぐ

斗に。
難しと人のいふなるこの業を、われはかの紅葉見るより樂しく思へり。よし樂しからぬにもせよ、老父の木を樵るが如く、獵夫の獸をかるが如く、天より定められたるわが職なればなり。いで八重雲の上にたちて、わが宇宙を睥睨せむ。
今年こそは下らじ、劒の峯の石となるとも、土となるとも。

秋雨のつれ〳〵に思ひあつむることゞも

風は雨をさそひて、破れたる芭蕉葉いよ〳〵破れ、錦と見えし木々の紅葉もさそはれて、今はなべて土に塗れぬ。あはれかゝる夕べ、故郷にゐます兩親の君はいかにかますらむ、去年のこし殘しわが子はいかにしてかあるらむ、物のあはれは殊に身にしみておぼゆるぞ。

さてもわが夫の君はいかにかますらむ、かの高嶺にのぼりて何くれと思ひはかり給ふならむ。さてもこの風やいかなるはやてなるらむ、この雨やいかなる深雪なるらむ、さては女なりとていかで風を悲しび、雨をあはれと歎くべき、歎くは皇國のために學の業のひらけざること。
何くれと學のわざはひらけたりといはゞいふべし、わが國にて最高き富士の嶺に、氣象をはかる處いまだ成らざること、いとあかぬ心地ぞする。わが夫の君は夙くこゝに思あり、ふるひたちてこの思をなさむとしたまひぬ。四十萬の人の思ひもかけぬことを、くはだて給ひしといふのみにても、妻となれる身のうれしからずやは。まして去年はわが身ものぼりて、その業に從ひたりしぞや。
とても時未だ至らず、夫の君は病み給ひ、恨をのに

し半にて下らむとせし時、かなはぬまでもと下山の命うけてのぼり給ひし和田技師のもとにつきて、夫が年頃の望なれど、せめて今年のみにてもと切にこひしに、いかに女なればとて、辨へぬにも程こそあれ、かの衰弱にては何事を成し得べきぞ、御身までさる心もてむざ〱と夫を殺さむとし給ふかといたく叱られて、せむかたなくわれも從ひ奉りぬ。女の身にても口をしかりしを、年頃日頃思ひ定め給ひしものを、いかならむと御心の内れしはかりまつりて、れもはず齒をくひしばりぬ。さるにても公のあつき御惠、今より思へばいと尊し、いとかしこし。今年は天神地祇、ことにはさくや姫の神にいのり奉りて、いかで聊にても恙あらせぬやういのり奉り、いかにしても三雪ふきまく三冬の空も、平らかにかの高嶺にてさせ給ふやうせまほし。さても都の空もやう〱あらたまりぬるに、この寒を凌ぐべき衣服調度を整へてとく送らむ。

物堅き父上の御許をうけ、わが國の人は更なり、外國人までもきゝ去りたる今となりて、もしも内のこと氣遣ひ給ひて、さはりなどのありもせむ、わが耻これより大きなるはなく、延きては夫の御名にもかゝはらむ、いでゐ給はぬほどの家のことは、返々もよきやうに計ひてむ。

さるにてもこの風この雨の夜頃、いかにか過ぎ給ふらむこゝにても身にしみわたり、心なき身にもあはれをればゆるを。

あはれ夫の君のみ身を平らかに坐させ給へ、平らかなれど年も越ねさるべけれど、越ゆることを得れど み志をも成さるべければ、成すことを得れど御名をもあぐることを得べければ、あぐることを得れど國

のほまれをあげて、學の道のいやひらけにひらけゆくべけれど。

さるにても尊き御身、人のわざには限ありとか、天地の神たち相うづなひて、助け給へ守り給へといのる心も、雨のあしのひまなく、秋の夜の長き思ひなりかし。

秋

千稻

秋漸く更けて虫の聲霜に枯るゝ頃となれり。庭前の桐の一葉落ちそめてより、朝の風夕の雨、冷かに見にしみ渡りて、千草色つき尾花亂れ、風光やう〳〵物哀に、空しく孤客の腸を斷たしむ。今し都の秋は如何、瀧の川の紅葉團子坂の菊、憶起せど胸迫り心亂れ、涙は草葉の露よりも繁し、アゝ我身に似たる此秋、いざ訪ひて共に愁を語らん、訪ふ人弔はるるか又訪らはるゝもの弔ふか。

月

金澤の町より一里程を隔て、湖あり河北潟といふ。頃は仲秋の空澄み渡りて風なく雲なし。獨り友あり呑六といひ松魚郎といふ。我破屋を叩いて此湖上に今宵の月を賞せんと勸む。淺野川の流を沿て野菊咲き亂れ尾花風に靡く中を分くれど、幽に虫の聲の喞くも哀なり。至れど日既に落ちて白山の頂に紅の光纔に殘りぬ。湖岸の茶屋に憩ひて一椀の澁茶を啜れど、舟子舟の用意整へりと報ず。よりて乘りぬ。四邊未だ暗くして湖面は鏡を開きたらんが如し。肉を載せ酒を載せ、蘆荻を分けて岸を出れど、月は

正に突兀たる奇峯の巓を離れて、翠空に一片の雲かからず、光は滴るが如く水を照して、金龍銀波の中に躍れり。酒を擧げ肉を焼き舷を叩いて興益熾なり。顧れば蜑の苫屋の窓を漏る、燈火は秋の螢か星の光か、折しも一吹の笛聲は此中より起れり。切々として泣くが如く訴ふるが如く水を渡りて來る。舟の中の人思はず袖を絞りぬ。纔に古潯陽を謡ひて哀を月に訴ふるも悲し。笛の聲は止みて月は既に中空に懸れり。露は白く雁の一列遠く飛びぬ。都の今宵は如何に。

山

清らかに晴れたる日を待ち得て一瓢を負ひ、大乗寺山といふに遊びぬ。秋風藍が花散る野らを渡れば尾花は道行く人の袖を控ねて、色附く萩の下葉はろ〳〵と散るも哀に、立並びたる松に匍ひ纏はる蔦蔓のもみ出るも興あり。いざや一杯の酒を酌みて暮れ行く秋に手向けんものと、人の聲隔りたる小柴を別けて、杯に浮ぶ紅葉の一片を肴として陶然たり。松風琴を奏づるを耳にして長閑に横れば、光暖かに枝を漏れ來て百舌鳥の囀づるもをかし。暫し秋の哀を忘れて夢と現の境にさまよふ耳元にアヽと叫ぶ聲あり。顔を擡れば、一群の少女籠を片手に茸を探りて他念なき所に、思ひもかけず、我等の眠り居たるを驚けるなりき。ほんたうに驚いてよ、何が動き出したかと思つてと。秋は無し、此等花の蕾の少女の身に。

川

重疊したる山と山との麓をめぐりて、急湍となり藍淵となり、やがて溶々として金澤の町を横ぎる川あり。犀川といふ。水清く澄みて軟砂恰も玉の如し。

兩岸は山の既に紅に染みて彩りたるが如く、柳の枯葉落ち盡して川瀬の音も寒く、岸に紅葉を笠に載せて一竿を傾けたる人あり。枯れたる蘆の葉鳴り噪ぎて水鳥驚き起つあり。見渡す水に秋の色やうやう深し。

寒鴉空しき枝に噪ぐ頃、冷かなる風サッと吹き起れば、山の頂にかゝりたる薄雲忽ち川の面を覆ひて、落ち來る時雨は恰も珠玉を散らすが如し。雲晴れ風收りて夕日花かに水を照せば、山の紅葉悉く川に浮びて流れもあへず、渡らば錦中や絶ちなん。

我住む家此川より遠からず、夜更け人收りて四邊寂たる時、机の上に音信るゝ者は只此川瀬の音のみ。これぞ夜中唯一の我友なる。

紅葉

兼六園は我邦に於ける屈指の公園なりと聞く。げに霞棚引く花の雲、月影凉しき緑陰のもと、何れ劣らぬ眺にはあなれど、露落ち霜置きて木々の梢を染むる頃、紅葉の影水に映りて妻戀ふ鹿の聲遠く後の山に聞え枝にすさぶ風の聲の雁が音にたぐふも、とり集めて哀深し。特に岩を疊上げたる斷崖の上に、常盤緑なる松杉の數知らず繁りたる間より、恰も銀河の氾濫して落ち來るが如き一條の瀧あり。枝をかはし幹をまじへたる紅葉は此上に差出で、枝は低く垂れて水を弄び水は高く飛びて枝に懸り、龍田姫の錦を晒して洗はんとするかと思はれ、唐紅に瀧をくくりて飛び散る滴をも立登る霧をも凡て紅に染めざるはなし。池を隔てゝ遠く望めば、紅の彩雲の瀧を覆ひて群りかゝりたりと疑はれ、風起り枝噪ぎてひら〳〵と散る紅葉は、其雲の一片遠く離れて亂るゝが如く、我は此頃、常に半日を此處に消して歸

るを忘れぬ。

菊

彼處の菊は見處あり此處の菊は面白し、それがしのは善く造られくれがしのは善く咲けりなど、人はこちたく云騒ぎていざと勸むれど、かくことゞしきを我は見んとも思はず、獨り杖を執りて郊外にさまよひ出で、雞高らかに鳴き、犬狗枯草に戯るゝ賤が屋のほとり行過ぎんとする時、ゐならぬ香のにほひ來るに懷しくて立寄れば、破れたる籬のもとに我は顏に咲き滿たる黄菊白菊、あはれにをかしく見棄て難くて、一枝を乞ひて持歸り、机の上の花瓶に挿み置けば、蕾なりしも咲き出でゝ室の中に薫り滿ち、清く氣高く朝夕の眺にはこよなき友なり。げに超然として俗塵を離れ、氣韻高潔類なき花にぞある。我もこれに習はんか。

☆ ☆ ☆ ☆ ☆

アヽ今年の我秋も早や暮れなんとせり。風起り時雨來り霰亂れ、此頃の此地は空曇りて日の光寒く、哀は益哀に淋しさは愈まし、無量の感は絶えず胸中に溢れて晴すに術なく、徒らに筆を執りて紙をけがせど、意迫り文亂れ、我ながら物狂し。窓の前なる連山には既に冬來りて雪は白う積れり。我は此冬を如何にして暮さん。霜月十日金澤のやどにてしるす。

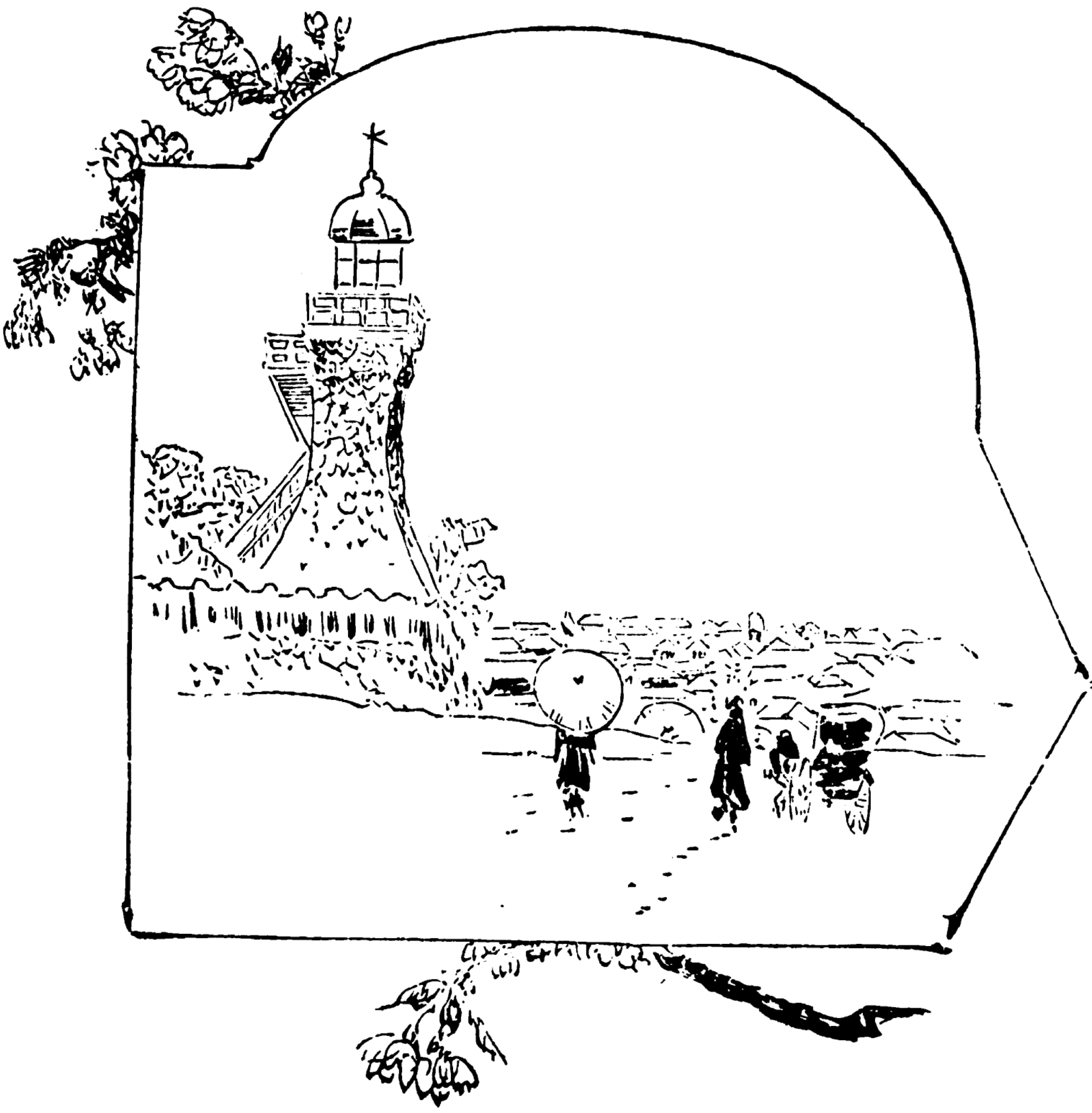
東京二十四景（十一）

栄園女史

九段坂

下る車、上る馬、引きもきらざる都大路の、下町と

山の手との間の咽喉にあたれる處とて往來織るが如く、雜沓、言はむかたもなけれど、坂を上りはてゝ、左に田安御門へ通ふ間の土手は目もさるに、都には珍らしきながめなり。こゝには、櫻の樹多く、春は錦をかざれり。都の半ばを眼下に見おろす。立ちならぶ人家のかず、幾十万といふことを知らず。うね〳〵と限りなき屋根のひかりさながら魚鱗をのべたるが如し。土手の下は、碧をたゝへたる堀にして、牛が淵となづく。堀の向側に、靖國神社の附屬地あり。池あり、樹あり、あづま屋あり、往いて憇ふべし。右の方は千代田城にして、石がき昔ながらにたち、



老松とこしへに緑なり。中に近衛の兵營ありて、時に喇叭の聲す。左の方には、坂の上に石を幾十丈も高く積みあげたる石燈立てり。坂を上りつくせば、靖國神社の馬場あり、馬場の直中に、大村益次郎の銅像、高く天に聳えたり。馬場はてたる處に、高く大なる銅の華表立つ。石燈籠と、銅像と、此の鳥居とは、人の目を驚かすに足る、九段坂上の看物なりかし。また西の空には、遠く富士山をながむるなど、あくまでをかしき景色なり。春秋二回、靖國神社の祭禮あるときは言ふも更なり、夜となく、晝となく、人足ひとしげく、流石に盛なる都のさまの見らるゝは、この九段坂になむ。夏は坂の上の木陰に憩ふものとりわけて、多く、景色よく、風凉しくして、塵の中としも覺えず、雪にも、月にも、はた花にも、四季のながめ、むなしからず。ことに夜に入りて見下ろせば、燈光天をこがして、さながら不夜城の如し。さて此の九段坂の上に靖國神社あれば、京童子の謎に、證文の如とかけて、何と解く、靖國神社と解く、ろは、件の上にありとの心なりとかや。

朴平（九）

白魚女史

さらでもおはんははづかしくおぼゆる人の、彼方より強ひてへだたらんとすれば、百代はなほ更に面あはさんもはづかしけれど、さりては都に何しには來たれる、母様のお歸りがけの御言葉、かへすぐも、げに妾もいつまでも子供にはなきにと、自ら心をいさめて、朝のことほぎ、夕の祈り、起臥毎のとひとぶらひ、世なみ人なみの禮義ばかりは強ひてのべんとすれど、彼方はつひに一度やさしうふりかへりて

も見られし事なく、よそ〳〵しげに空にのみせらるゝ答への中に、何となう氣落し恥しめ給ふやうなる心さへ、うつりて覺えられ、百代はいつもあられぬ心地して、すご〳〵とかへして、ひきこもる部屋のうち、ひとりかきくれて、空も定めぬ物思ひ、如何にせん、如何にせまし。おぞや、こずばよかりき、古鄕にまでぞよかりき、げに人の迎へんまで、父君のこゝろよく送り給はんまで。さらば、昨日も今日もあこがるゝくるしさはあらんも、かくつれなきかなしみはなかりしものを。さてもはしたなきみづから、日來あこがるゝ心の底を母様にさとられし故に、此度の御はからひ、げに妾に迷ひ給ひての思召なりしを、さりとも今までさとらで、御言葉にまかせしあさましさよ。あの時、あの折り、いづくまでも辭まばよかりしものを、よかりしものを、人よく〳〵のかひなきものとおぼせばぞ、かくは、よそにのみは見給ふならんに、もし、さる恥見る事の父君に聞えなば、如何ばかり腹立ち給はん、うらみ給はむ。また母様さへが、さこそ叱られ給ふらめ。父母なればこそ容るしたまはんとも、子として父母に何の面目かあるべき、生きて、生きて、妾が。のう文雄様、文雄様、おん身を命の此の百代、あはれと思ひて助けもたまへ。はしたなかりし振舞も、おん身をあこがれゆきたる心の亂れのみ。今は思ひさとりぬ。さとりて思ひ正しぬ。待ちてとの給はゞ、よしや十年廿年、百年も、かくて必ず。だゞはしたもの、淺ましきものと御いかりも、おとしめも遊ばされし御心ばかりはなごめ給ひて、やさしき御言葉はあらずとも、おそばへはゆるし給はずとも、あけくれの御用ばかりはとらせ給へ、文雄様、もはやはしたなき心は、ゆ

めもたじ、思ひはせじ。さてもいつぞやの夢、夢にさへ知られしをと、ひとりなきくづるゝ折りふし、まどをわたる厂がねの聲、數ふれどまだ幾日もあらねど、そゞろに故鄕の空なづかしう、つく〴〵とながむる折りしも、おとづれたるは、例の朴平。孃樣と呼ぶ聲も、半はむせびて聞えず。おたよりがと文さしおきて行くうしろかげ。いとしや、消えも入りげなり。むかし文雄樣が故鄕をたち出で給ふ折り、妾がすがりてなきしを、よき孃樣よ、なき給ひそ、都に行かむ伯母御に乞うて、よき錦繪ある限り送りまゐらせん。のう孃樣、おとなしうまたれよ。しぜらくの間なり。此の朴平が髻の色かへぬほどに。やがては迎へまゐらせん。のう伯母御前とて、ちよんまげをたゝきて見せしさまのをかしう、幼心にもよくその時の髷のさま、黑き髮のいと太くうつくしかりしとおぼゆるを、いつのまにか霜ふかきおどろのさま。今日此の頃、自らがおとづれてよりは目に見えて白うやつれゆく髮の色、さこそやものを思ひてと、つく〴〵と見送りて、ぞゞろに淚にかきくれつゝ、さしおきし手紙手にとりて見れど、母よりとあるに、はやもなづかしう、急ぎ封きりよむに、

その後は如何に、少しは女子らしうかしづきなれてか。母を送り出でたる袖におとされし淚の色の、何となうおぼつかなく思はれて、とかく心元なくぞ思ふ。よしやいかむかり人のつれなくへだたらんとするとも、もとより親のゆるして、親のつれ行きしなれど、はしたなき事も、はづかしき事もあらじぞ。返す〳〵も子供にはあらじぞよ、父君に母をな叱らせそ、くれ〴〵も心のどかに、青柳のやさしきふしにかしづけよと、言葉づよう書き給へるが中に、細

々とこもるなさけの露、いとゞ身にしみて、沈みぬべき思ひを、我とはげまして、汲み給はぬにもせよ、悦びたまはぬにもせよ、もはや疲れたまひてならん頃なるにと、色もかをりもいとゆかしき薄茶入りの珈琲、さめぬほどにと、いそ〳〵ともちゆけど、彼方は例の入らぬものをと云ふさま、見むきもせず。百代はなほもわたりに心をくばり、火も消えてさびしげなる火桶、あな心もつかでと、直ちにいけかへて持ち來れど、それも賴まぬことをと云ひげに、そのまゝ傍へおしやりて、指もかざさず。はては、何思ひけん、つと立ちて、衣服をあらたむるに、何處かへ行かせ給ふとゝへど、答へもせず、とつかは立ち出る玄關先き、送り出るといはんより、追ひすがるやうにて、つゞきて出で、れ早くと云へども、それも聞えぬげ。朴平慌てゝ出で來りて、何處へか若殿ととへど、春野へと唯一言口重げに答へて出で行くうしろかげ、見送りて、ほつと一息つく老僕の心の中や何を忍ぶらむ。百代もしばし見送りしが、力なげにしほ〳〵とひきかへす文雄の書齋。つねににす。書物などとり散らしあらぬは、百代に手をふれさせまじと思ひてにや、百代はむせぶ心をしづめしづめて、水となせし茶をも、そのまゝにこぼし、灰となせし火桶をもとりかたづくれど、消ゆるばかりの心地す。なほそこらのちり、あらぬほどにとて、拂ひつ、はきすつれど、机の下の片隅より出る文、何心もなくとり上げ見れど、我が母より文雄へおこせしなるを、封をも切らで、なさけなき押し揉みて捨てたるなり。あまりのことにえこらへず、わつとばかりに疊に泣きふせど、何時の間に來けむ、朴平、御道理ぞ、嬢樣さこそはかなしうもつらうもれはさめ、


松亭



御道理ぞ、朴平もかくまでと知らば、御迎へも申奉らざりしを、此の朴平が、誠に孃樣にもわび奉る言葉もなく、身のおき所もなくこそおぼえ候へ。さは云へ、孃樣、いつかは、朴平の老い腹つんざいてなりと、若殿の御心をとき奉らんに、今暫時御堪忍遊ばしてと、それも涙になりて、疊に頭うちつけてわび入るさまに、おどろきて、なに、朴平、さる事にはあらず、机の足にて指をしたゝかに挾みたる痛さに、おぼえず泣きたるのみ。人騒の事なりきと、よそになしてさりげなくとりつくろへど、朴平は目ざとく百代が手にせる文を見とめて、そは先きに御國元よりまゐりたる御文、まだ封も切り給はでか、さてもあまりと云へばとて、老眼おしぬぐひながら、さりてもよく／＼御心にかけらるればこそ、歸らせられてより早速の御玉章。朴平づれの目にふれんも物体なけれど、せめては我れよみて事の樣きこえ上げ奉らんと、封おしきるも、國元よりの文よまですてたるを朴平が拾ひて、よそながら返へしなしたる事も、しば／＼の事にて、めづらしからぬ事なりとか。娘はその人ならぬ人にあけられんも心なれけど、何も忠僕の心にまかせて、うちよむをきゝ居ればば

何處へ行くも母のうしろ、誰がとふも母の傍、我が傍さりては片時もえあらざりし子供そだちの百代、都になれ給ふ君には、嘸かしもどかしきふしのみにましまさんが、よく／＼叱りてなりと、こらしてなりとも、かへす／＼敎へ給ひて、おはし給ひし折りよりのふかきえにし、必ず／＼御しうとご方の御位牌、必ずかしこう守りつかふるやう、御敎へさせ給ひてよ。文雄どの、くれ／＼もねぎ參らす。

それに、昔にかはりて、朴平もいたう老いたりげ、心きかぬ娘、云ひつけ給はんもうるさうましまさんが、何かの手助け、御傍の御用、くれぐ〵も若きものにとらせ給へかし。

などしたゝめあるに、朴平は更に娘も聲なくむせびかへりぬ。

文林



籬殘菊　近衛忠熙

朝しものむすぶまがきのしら菊は
うつろふとしも見えぬ色かな

森時雨　毛利元徳

時雨の雨間なく降るなり山しろの
常盤のもりもいろかはるまで

冬灯　久我建通

冬かれもまどにすきまはなき物を
ひかりさむけし閨のともし火

初冬月　高崎正風

かへり花匂ふこずゑにかすみけり
小春のそらのゆふづきのかげ

里時雨　鍋島直大

降りかゝる時雨の雨にぬれぬれて

このは音せぬさとのなかみち

月前時雨　前田利嗣

月かげの雲間をもりててらせども
しぐれふるなり庭のあさぢふ

田家初冬　津輕承昭

垣つたにひとりかゝしの影見えて
いり日淋しきふゆはきにけり

寢覺霰　長谷信成

ねさめつる折しも窓にをとたてゝ
霰ふるよのさむくもあるかな

時雨　宮地嚴夫

風のみは松にのこりてむらしぐれ
ふりしあとゝも見えぬ空かな

冬野　小出粲

さとの子が小鳥あみはる冬の野の
枯ふにさわぐこがらしのかぜ

曉菊　遠山英一

鐘のねにおきいでゝみれど有明の
つきよりしろししらぎくの花

松間紅葉　三輪貞信

をぐら山夕日のほかのくれなゐは
松の木のまのもみぢなりけり

暮秋月　諏訪忠元

あきもはやくるゝゆふべの月影を
こゝろ細くもあふぎ見るかな

菊滿池塘　藤井行麿

君か代はきくもさかえてさく花の
ますたの池に香さへみちぬる

をりにふれたる　三浦千春

あらいその岸の岩うつなみを見よ

くだけてこそは花もさきけれ

平政子　三輪義方

咲きほこるかりそめのをのの撫子に
庭のをしへをくはへけるかな

北林禪尼　柴田靜榮

細かはのきよきなかれも十六夜の
月かけなくはむなしからまし

中村升子　佐々豊水

常陸のや久慈の郡のくしびなる
かげまさやけき女鑑かな

月前雁來　木庭芳香

ゆくかりは誰か玉章をれくるらむ
手にとるばかり空につらねて

閑庭萩萱　安齋篤敬

わかいほは心しづけくあるものを
庭のかるかやなどみたるらん

秋月入簾　石原均

いよ簾入り來るつきのかげきよみ
かひなくなりぬ夜半の灯

閑居秋　鈴木伊摩吉

世はなれて閑けき庭のはなすゝき
まねけど秋は訪ふひともなし

山家落葉　近衛貞子

松のみとよそには見ゆる山ざとの
みちも落葉にうつもれにけり

山時雨　鍋島榮子

初紅葉たつねわたりてかへるさの
やまぢに又もしぐれふるなり

社頭冬月　前田朗子

みやしろの榊のゑだにしも見ゑて

さすが寒けきふゆの夜のつき

谷落葉　柳原愛子

さえ渡るのきの月にかけみえて
紅葉ちる夜のさむくもある哉

行路霜　小池道子

てる月のかけふむ道のさむきかな
またよひなから霜やれくらん

谷落葉　保科節子

中々に木のはのあめのふりそひて
あさくなりぬる谷がはのみづ

暁千鳥　松平健子

さしくしのあかつき月夜さえ渡る
やつ山かけに千とりしはなく

初雪　高崎竹子

樂しげにうち見ゆるかなはつ雪の
つもれる庭にあそぶうなゐ子

夜木枯　岩崎寧子

木枯のこのははらひてさびしくも
なれるこすゑに月ぞかゝれる

竹霰　河村重子

さゝき鳴る庭のたかむら風さえて
降るれとさむきたまあられ哉

菊映水　税所敦子

有明のつきかげしろししらきくの
花にも葉にもしもやれくらん

朝時雨　中島歌子

そでかきのきくの香さそふ朝風に
そひてふりくるむらしぐれ哉

月浮水　遠山いね子

はちす葉は大かたかれし池の面に

うかべる月のかげのさやけき

閑庭菊　諏訪晴子

つくろはぬよもぎか庭の菊のはな
思ひのまゝにさきにほひけり

鎌倉月影が谷あふつ尼の塚にて　安東菊子

十六夜の筆のすさびのくらからぬ
あとをとゞめし月影がやつ

松間紅葉　内田遊歌子

山松の木の間に見ゆるもみぢ葉の
いろはひとしは深くぞありける

秋旅　清水靜子

旅衣みやこをあとにいで立てど
ろでの露さへれもくもあるかな

秋の夜半故郷をおもふ

林榮子

嵐もあきもふけゆきて。木々の梢もうらがれぬ。
のきばの月のかげ寒く。かどの板ばししも白し。
さほれにひゞく小夜砧。誰誰が爲に打つならむ。
庭の淺ぢによわりつゝ。なくなる虫の音も細く。
さほき旅路の假まくら。ねらるゝ今日の夕がは。
けふのよさむに故郷の。父母いかにおはすらむ。
我が同胞もつゝがなく。學びの道をたどりてか。
心もちゞにくだけつゝ。ながむる空の霧がくれ。
列をばなれし雁ひとつ。友をたづねて鳴き渡る。

雜報



●天長節　去し三日は、かしこくもわが　大君のあれまし丶、たぐひなきよき日にて、玉しきの都をはじめて、天さかるひなに至るまでに、日のみはたたかくか丶げ、老若男女をいはず、君がよは千代に八千代にとうたひあげて、大御壽のた丶なが丶れといはひ奉らざるはなし。この日、れふぞらには一ひらの雲だにもなく、日かけうら丶かに照りわたりたるも、大御めぐみのあまねきみしるしにこそとあふぎ奉るもたふとしや。

●天長節御兼題　此程宮中にて催はされたる御兼題「菊滿池塘」の詠進は

れいの波よせぬみ池のつ丶みをぞ
　ちよのところと菊も咲くらん　高崎　正風

菊の花さかりになれはれのつから
　みいけの水も澄みまさりけり　鍋嶋　直大

すみわたるみ池の水もにほふまで
　ちもとの菊は今さかりなり　津輕　承昭

みそのふのいけのつ丶みの白菊は
　ちよをよせたる波かとぞみる　松浦　詮

白菊のはなのかげこそうつりけれ
　み池の水もかをるばかりに　大谷　光尊

咲きつ丶くつ丶みの菊の水か丶み　福羽　美靜

やちよのかげも浮ぶいけかな

ちよかけて菊のかをりも滿ちて鳧　水野　忠敬
此みそのふの池のみぎはに

れは澤の池のつゝみに咲きみちて　清岡　長延
水そこまでもかをるしらぎく

九重のみいけの水もかをるまで　町尻　量弘
咲き滿ちにけりきしのむら菊

風わたるつゝみの菊のはなさかり　油小路　隆元
池の面にもかをりみつらん

池の面もひかるかはりに匂ふかな　黒川　眞頼
つゝみにあまる白ぎくのはな

紅葉のちりうくひまに影みえて　坂　正臣
池のめぐりの菊咲きにけり

九重のみ池の水もかをるらん　清岡　長吉
みぎはの菊の花のしづくに

ちとせふる堤のきくのかげみえて　小出　粲
れいの波なき池の面かな

水けふり朝日にきえて菊のはな　植松　有經
みえてそわたれ池のつゝみに

波たゝぬみいけの水にかけみえて　大口　鯛二
つゝみせましと咲ける菊かな

池水はちよをたゝへしこゝちして　鎌田　正夫
つゝみにあまるしらぎくの花

波たゝぬみ池のちよのかけみえて　千葉　胤明
咲きそろつゝけしらぎくの花

よろづよの鑑もあそへる池水に　遠山　英一
つゝみの菊の影ぞうつれる

●觀菊御會　去し十二日、赤坂離宮にもよほさせ給ひ、兩陛下おはみゆきありて、あらゆる有爵のもの、又たなじき御待遇の臣下をも召させ給ひ

て、今日を盛りとにほふ菊の花ざかりを覧はさせ給へり。

●華族女學校の開校紀念式　去し十三日は、開校せしより、十一年にわたれる日なれども、午前八時より、職員生徒ともに、講堂にあつまりて、御眞影ををがみ奉り、細川校長令旨をよみあげ奉り、さて後講話もあり、生徒の祝辭唱歌などありて、式ををへしは、十時すぐるころなりき。

●婦人育兒會の總會　こだひにて、三度にわたれる總會にて、去し十二日、小石川なる大學植物園にてもよほされたりとふ。この日ていけとよろしく、園の紅葉もいろつきて、一しほの光をそへ、午后二時といふに總裁なる有栖川御息所殿下には、鍋嶋會頭の御先導にて、御臨場あり、會員一同に御挨拶ありて、育兒五十餘名にも、御目見をたまはり、いとあつき御詞をさへたまはりしかば、小兒どもは、あまつ日をあふぐが如く、喜しさ色にいでしに、會員もこれを見て、みな袖をうるほせりといふ。なほさまぐ〵のことありて、午后四時散會せりときく。

●天の益人　わが國の戶數はすべて、七百九十三萬にて、人かずは、四千廿一萬人なり。このうちにて、華族のもの四千人、士族のもの二百五萬人、ろの餘は平民なり。さて又いにし廿八年中に增殖したる人かずは、四十五萬七千人なりといふ。あめの益人とは實によくいひけんかし。

●歌詩募集　小楠公五百五十年祭は、明年十二月にわげらるべきにて、紀念にとて、世の篤志者より歌詩の詠進を求むといふ。課題は、四條畷懷古、寄弓祝の二題、料紙は式紙又は短冊、期限は十二月三十一日、屆先は、大阪府北河内郡甲可村四條畷神

社々務所なりといふ。志あらんものは、言の葉の花をさゝげ奉りてだに、神慮をなぐさめ奉るべきなり

●教員檢定試驗規則　はこたび改正すべしとかにて尋常中學校、師範學校、高等女學校の教員檢定試驗規則の內受驗料を低くし、受驗課目をれはくし、なほ受驗者のたよりよからんやうにすときくがまゝを。

●看護婦の渡臺　こひび臺北、臺中、臺南の三病院にて、雇ひ入れたる看護婦三十名は、去し八日神戸を船出して、臺灣に渡れりといふ。女ながらけなげなることなり。

●熊本女學生の氣風　女もをりにふれては、をゝしきふるまひなかるべからず。しかれども、つねはつゝしみて、あら〳〵しきふるまひあるべからざるなり。そも〳〵時にあひてれのが眞心より出てたるにあらざれど、をゝしさも何にかはせん。人まねしたりとて、何のかひかあらんや。男女れのづからそなはれる性あり。男の女めきたるもかひなく、女の男めきたるも亦ねうなかるべし。まして遊ひわざにもしひて男の眞似事したりとて、女の能事とはいひがたかるべし。男には男のすべき天職あり、女には女のすべき天職あり。ふみあやまるべからず。世のものわらひぐさとなるは、さてもあるべし。かくては女たるべきには如何にとればねて、いともなげかはしきかぎりなり。學校なれど、監督のものもあるべきに、ふさはしからぬことなりけり。こゝにはあるがまゝをかゝげんに。

當地にて唯一の女子教育機關たる尙絅女學校にては去る三日天長節の佳節を以て出水神社內に盛んなる運動會を催したり其數四百餘名にて仁輪賀師も如何

がやと思ふ程の遊戯少からず聊か教育者の注意ともなるべきを以て其一班を左に通信す

さて女生徒一同は何れも飛白單衣に紫毛繻子の帶を下郎結びとなし頭は年の高下にかゝはらず新蝶々に菊花ぞろひの花簪をさし襟は白色の揃ひと云ふ御洒落なり又た會塲なる水前寺にては萬般の用意整ひ富士山下を遊戯塲に當て一隅に幕を張り六年生音樂隊の文字記したる旗をたて内には樂聲終始絶えず聞えぬ此日の遊戯は種々ありしも不倒翁、球拾ひ、母衣駈等なりし特に目立ちて見えしは妙齢の淑女とも見ゆる生徒が（一組十人乃至十四人）半紙張の母衣を背負ひ後鉢卷に十文字の玉たすきを掛け柄の長き梵天打ふり一名の從者を從へ大手を振て出て來る此大將宜き所まで進み出て黄なる聲を振り上げて曰く遠からん者は音にも聞け近くは寄て目にも見よ斯くまをす某は木曾左馬之頭義仲の身内にて四天王の隨一と呼はれたる今井四郎兼平なあり此口調にていつれも昔し高名なる武將勇者の名を名乘り了りに弓矢を取て力を見せんこれにて一組の人員揃ふと相對して一連にならび首席の大將叫ぶらくいかァに方々勝負致さう曾なく〳〵同音に勝負仕らう此時他の女生徒は手を叩いてヤンヤ〳〵と喝采し一同入り亂れとなりて梵天を奪ふて立ちかへる時なんどは銘々目をむき出し口髯を捻る眞似してたゞ見物の笑ひを求むる者の如し次は四十二人（皆な十四五の女）うしろ鉢卷玉たすき額に扇をはさみ霞か雲かの唱歌につれて塲所を一週したすきを解いて標點に備へあるくゝり猿を背に負ひ山下を一週してかへる夫れからモ一つは撰科生（年齢二十一二）十四人いづれも木劒を持て旭に匂ふの唱歌にて塲内を驅廻り夫れより早替りにて日本人七人、支那人七人と化け、支那人金盥を頭に冠りて縛足競走をなしいづれも不結果にて金盥かぶりし儘スッテンコロリと轉げ落ちたるもありし此外備後三郎は何人も〳〵簑笠出立にて立板に天莫空勾踐云々の二句を書いて歸る等扨も〳〵天晴なる運動會なりし（在熊本實見生）

●新海苔　品川、洲崎、大師河原、は去年よりは出來よろしく、大森ぞかりはれとれりといふ。さて

大師河原あたりは、十五六日、品川あたりは二十日ごろに、出荷あるべく、價は去年よりたかきかくなりといふ。

●眼あきは不自由のものよ　とはわが國にてのむかしがたりにて塙撿校の美談なり。いま米國ボストンの某陸軍大將の女にて、名をヘレンケラーとて十六歳になれる處女あり。生れながら觸感の外には、何の感覺もなくて、いとあはれなるものなるが、こたびハーワード大學の入學試驗にとゞこほらず登第して、今その學生になれりといふ。この女受驗の際に、敎師の唇に手をあてゝ、その動作によりて、よく試驗問題をさとり、答案をぞ「タイプライター(手にて押捺すべき印刷器)にて、みづから明らかに書きたりといふ。もと七歳のころまでは父母も見かぎりて、うちすてありしが、今より九年以前に、ボストンの盲人學校に入學せしめたり、かくて後三年をへて、發音の術をさとり、後轉じて、ニウヨークの盲人學校に入りて、いよ〳〵はげみしが、遂に手を人の唇にあてゝ、たやすく人の言語を覺るをうるに至れりといふ。今は英語、獨乙語、佛語をも、いとつはらかに、物語りうといへり。不具のものとてすつべきにはあらずかし。

●流星地におつ　去八月九日の午後九時ごろのことなりとか、米國のアリヅナなるペシー鑛山に近き砂漠中に、百雷の如きすさまじき音して、おほきなる火焰の一大塊にはかにおち來りしといふ。さてそのおちたりしときは、大地浪の如くゆらきて、家屋もいたくそこなはれ、あたり近き五六哩のところまでは、硫黃の烟みち〳〵て、息つくべくもあらざりしといふ。この大塊は廣さ二英里ばかりにて、巾數

百呎もありて、今なほ地中にふかくうづもれりといふ。

●末松文學博士の講話

婦人の務（つゞき）

付ては、將來の女子の職分に付きましては、女子相應の事に眼を注がなくてはならない、諸君の中にも、前に申しました通りに、師範生徒の方に於きましては、是から何年間のあひだ段々と子供を養育しなければならぬ義務を御持ちになつて居る、然る時には、其教育を爲す上に付て、一つ充分に自分の頭に、是が即ち國の爲である、是が即ち天下國家を維持するに最も適當なことであると云ふ斷然たる主義と云ふ樣なるものが無くてはならないのである。主義とか、天下國家と云ふ樣なる文字を使ひますと、エライ六ケ敷い樣に聞ゆるけれ共、夫れはさうで無いといふ事を一應申しますでありませう。此間、私はチヨット西洋人の書いたものを見て居りました中に、英吉利の女子教育の制度の不完全なる事を調べた書物がありました、其中には色々な事がありますけれ共、今日之を申し上ぐる必要の無いことも多うございましたが、其中私が一つ感じましたのは、兎角英吉利の學校あたりでは、唯だ何と謂つて宜しう御座りますか適當な譯字がござりませぬが、漢字で謂へた、浮華とでも申しませうが、浮華な事柄を敎へることが多過ぎるのである。大事な人の心を花にし過ぎて、本當に實が入らないと云ふことがある、其意味は、音樂、歌、或は繪を畫く事などを指したるものにて此等の事も全く惡いことではない、或る意味にては隨分肝要であります。

教の庭



十一月廿日兼題　燈火

天

つひに身の光となりててらすらん
　文讀むまとのともしひのかけ
神戸多聞通六丁目十八番屋敷　近森のぶ子

地

身を照す光りとこそはなりぬらめ
　まなひの窓のよはのともし火
信濃國上伊奈郡赤穂村　小町谷園子

人

語らはん友もなき夜のさひしさに
　またしまるゝはともし火の影
山梨縣甲府市山田町　名取正代子

秀逸（十五首）

夜更くれは心はそさもまさりけり
　闇のともしひかけくらくして
田代艶子

打ち向ふ文讀むまとのともしひは
　我か身に添はる光ならまし
永井千歳子

終夜たかふみまなふまとならん
　竹のはやしのおくのともしひ
永井さい子

暗の夜もひるにたかはす文見るは
　此の燈火のあれはなりけり
勝　百代子

ほたるにも雪にもまして親しきは
　文よむまとのともしひのかけ
河野文子

たどりゆく山路の末のひとつ屋に
　見えてうれしき窓のともし火
三浦時子

ぬしや誰影ゆかしくも小夜ふけて
　をすよりもるゝ闇のともし火
柳田里子

とふ人もまれなる宿はともし火を
　友となしてそ夜をあかすなる
吾妻近子

人にあふこゝちせられて嬉しきは
諸井久良子

ゆきくれて見る燈しなりけり

うなゐ子か文よむ窓のともし火の　かけこそ御代の光ともなれ　日高かず子

夜もすからちまたをてらす燈火も　みよの光のひとつなりけり　武田すみ子

たゆみなき學のまとのともしびは　こゝろをてらす光なりけり　瀧　かよ子

ひらきもの心のやみもてらすめり　ふつくゑに置くともしびの影　今藤　仲子

靜かなる窓にふけ行くともしびは　まなびのれくや照すなるらん　林　久子

ひかりなきまなびの窓に年をへて　むかふもやさしともし火の影　八太　光子

（以下原稿到着順）

かかけても彌々ほろくなりにけり　わかつきちかき窓のともし火　佐々有鄰子

よなく〵に揭ぐる甲斐もなかり燈　まなびの窓のともしびのかけ　佳山　幾子

あきの夜はわけてしたしき燈火に　ふみのはやしの道をたつねん　甲斐莊俊子

ともしびの光しあくはぬはたまの　夜道はいかにわびしからまし　仁井田富子

冬の夜はみやこの大路ひと絕ゑて　殘るもさびしともしびのかけ　野口まな子

見渡せは星のひかりかはたるひか　ほかけまたゝく杉のひとむら　吉田　雪子

水影はながしはまへのしつか家の　壁のひまもるともしびのはな　田中　靜子

うちわたす勢田の長橋てりわたり　みつかけ長しはまのともしび　保井ゆさ子

夕時雨わけ行く野路にさびしくも　しめりて見ゆる里のともしひ　野口靜江子

いにしへは雪を賴みのものまなび　いまは嬉しきはなのともしひ　星野　式子

まつひとの來へききさしか燈火の　てうじがしらそ嬉しかりける　星野　仁子

ひたすらにたのむこゝろの燈火は　まなびの友とれもひけるかな　星野康世子

いまもなは見ぬ世の人を友として　わかすも嬉しともしびのもと　芦澤　菽子

去つかにも夜半の燈火かきたてゝ　　田代　綾子
文を見るこそたのしかりけれ

野守すむ宿にもあるかほそほそと　　仁保　基子
たどるゆふへのともし火の影

螢火をたのみしひとにかさはやな　　及川千尋子
稲妻ならぬ御世のともしひ

よひ〳〵に文よむ窓のともし火は　　香川　潁子
親のめぐみのひかりなりけり

文まなぶ人やあるらん夜もすがら　　冬木あか子
すぎ戸をもるゝともし火の影

くらきよにみさきを照らす燈火の　　奥　環子
ひかりは國の去るしなるらん

消えやらで殘るかひなくよむ文の　　小町谷里江子
かけふけにけり窓のともしひ

淋しさはいやまさりけりなく雁の　　瀬戸　榮子
聲もかすかにのこるともしひ

なかき夜を机にひとりたのしきは　　徳永萬壽子
かゝげてむかふともし火の花

雪ほたるあつめし時を思ひやれは　　遠山　霞子
いとありかたき御世の燈火

文まなふまどのともしひ池の面に　　大竹はな子
長くうつりて夜は更けけり

明らけき御代のひかりに比ぶれは　　大竹　治子
をぐらくみゆるともしひの影

ともしてふ物なかりせはうつ蟬の　　福木　鉱子
夜はとこ闇になりや果てまし

ふる雨の久しきまゝにいにしへの　　長州餘野子
人とかたらふともしひのもと

木の間よりさやかにみゆる燈火の　　碓井　武子
ひかりもゆかし山もとのいほ

ちら〳〵とあちらこちらに燈火の　　碓井わか子
ひかりさひしきかた山のさと

燈火のかけをしるへにゆふへ〳〵　　上條よし子
文のはやしをわけ見つるかな

ひとりすむ山下いほのともしひの　　笹木千鶴江子
こゝろ細さをよそめにもしれ

長き夜もあかつき近くなりぬらん　　萩原　繁子
やゝうすらけるともしひの影

我宿のひまもるかせも小夜ふけて　　原　いち子
かけよわり行く閨のともし火

なか〳〵に寝覺の友となりにけり　増田すゑ子
ひとり殘れるねやのともし火

文机をわつかにてらすともしひに　錦織さち子
淋しき夜半もなくさまれけり

くれ竹のかけをもりつゝ風の音に　中島房子
をり〳〵みゆる庵のともしひ

くれ竹のはわけの風のふくことに　西村癸羅子
をり〳〵みゆるともしひの影

夕風のふき入るまとにふみよめは　秋園菊子
たえすまたゝくともしひの影

やへむくら繁みか奥のかくれやも　島田好子
をり〳〵みゆるともしひの影

やまふかくをり〳〵みゆる燈火に　楠　精子
住む人ありと知られぬるかな

小夜ふけて訪ふ人もなき草のいほに　水島良子
かすかにみゆるともしひの影

よをわひて誰か住むらんこの奥に　野田千代子
木の間をもれてみゆる燈火

よもすから訪ひくる人もなき閨の　西村佳子
ねさめの友やともしひのかけ

よそめにもいふせき窓に小山田の　小川富子
木の間をもれてみゆる燈火

あしひきのやまたの庵の夕まくれ　小川金子
をり〳〵みゆるともしひの影

文まなふ窓の小さゝのすき間より　吉川國子
しづかにてらすともしひの影

よをさけて床しくすむは誰が庵ぞ　吉川勝子
竹の生もるゝともしひのかけ

遠方の木の間をもれてともしひの　木村兼子
ほの〳〵見ゆる影のあはれさ

遷りゆくよのありさまも變りけり　白井玉子
こゝろしてみよ廻るともしひ

くれ竹のはこと〳〵に影みえて　大島愛子
もるゝゆかしき窓のともしひ

くれ竹のなひく間よりたえ〳〵に　細井糸子
かすかに見ゆるともしひの影

ふゆのよの長きよわかすよむ文を　花山保江子
てらすもうれし窓のともしひ

ふゆのよのふけゆくまゝに燈火は　花山操子
ふみよむまとの友とこそなれ

物おもふ閨のともしひかけふけて　小野田信子
こゝろ細くもなりまさりけり

燈火のかけもなかく〵あはれなり　福原蕙子
冬のよなかのどもとれもへは

文よめとまとひは深しふかき夜の　春永己巳子
こゝろの暗をてらせともし火

いねかての枕にこの夜ふけぬらん　梅本文子
ねやのともし火影うすれゆく

久方の日はいりにけりよのひとよ　星野暦子
ともしび置きて何かもとむそ

よもすから手習さしてふみよみて　横田秋子
かきもつきせぬともし火の影

窓の戸はあけかたちかく成にけり　横田須磨子
また夜とのこすともしひの影

山かつかすむ柴のとのともしひは　土肥仙子
ふる家路のしるへなるらん

わかれもふあかつきまても燈火の　岸せつ子
かゝけてつきぬみよぞ嬉しき

文學ふひとやあるらんたけむらの　萩原章子
葉こしに見ゆるともしひの影

ぬは玉の暗のたのみそこれなくは　館脇ます子
何にあやめもともし火のかけ

からやまと昔のさまもあきらけく　池谷とみ子
見するともしのかけそ嬉しき

たらちねとともしゝ夜はの燈火の　守山比古子
かけのいまさら忍はるゝかな

冬のよはわれのみならて影あかく　羽田三緒子
人もまなひのまとのともしひ

むかしにはしらぬ燈火かすまして　河田いし子
みやこれはちは暗のよそなき

獨ねのねやのともしびさよふけて　粟田口信子
ほかげさびしくなりにける哉

文机の上をてらせるともしびは　大谷津琴子
たのか學ひのともとこそ見れ

寒き夜はみやこ大路もひとたえて　大谷津綾子
軒のともしびひとりかゝやく

長き夜に夜のいとなみなすときは　平野とき子
ともしのみこそ頼みなりけり

やみの夜に燈火なくはあやもなし　植木とよ子
學ひのみちもかくこそありけれ

さよふけて文よむ窓のともしひの
光りもうすくなりにけるかな　石川すけ子

なかき夜の虫のなく音の眞夜中に
ともしの影ぞあはれなりける　高楯とし子

おもしろく文よみ居れど吹く風に
ともしひきえておとぞ淋しき　佐藤ゆり子

うたゝねによやふけぬらん文机に
ほのかに殘るともしひのかけ　青木　春子

ゆきくれて辿りかねたる深山ちに
見えて嬉しきともしびのかげ　牛谷いく子

さよふけて夫の歸りやまちぬらん
板戸もりくるねやのともしひ　山根　久子

すむ人のおもひもちゝに亂るめり
風にまたゝくともしひのかけ　勝部しう子

暗けれは奥知るよしもなかりけり
學びのまとのともしひのかけ　服部勝美子

暗きより暗にいりてふみまよふ
道のゆくてをてらせともしひ　北川はな子

淋しさの限りなりけり小夜更けて
ほのめく闇のともし火のかけ　鷹野　靜子

ぬはたまのくらき心をよもすから
ひもとく道にてらすともし火　松岡　濱子

ともしひの光をかりてこよひまた
ひもとく文をよみつくしけり　北村てい子

くれ竹の葉末にうつるともし火は
たか文まなふひかりなるらん　廣田とめ子

よな〳〵に文よむ友となるものそ
つくゑか嶋のともし火のかけ　高井　孟子

都道もくつの音たえてたひゝとの
たのむは宿ののきのともし火　鹽路花枝子

玉ほこのみちをたとりて闇の夜も
ふみはまよはしともし火の影　續木　龜子

掲けても甲斐こそなけれよむ文の
暗きこゝろかてらせともしひ　谷川　清子

よむ書のこゝろに時はうつれとも
たなしかけなる窓のともしひ　小山勢幾子

いつしかもふみみるまゝに燈火の
影れくらくも小夜更けにけり　高田　清子

よな〳〵に文見る窓にかゝけても
こゝろはくらしともし火の影　野中おさ子

これなくはいかてはけまん物學ひ　土井　渚子
よるのしるべは窓のともしひ

たかすめる家居なるらん琴の音も　久松　誠子
もれてほのかに見ゆる燈火

夕くれに宿からなんとたひ丶との　深見　聰子
ゆくもたよりの森のともしひ

くれてなほやとり定めぬたひ人の　原　志津子
ゆくてにうれしともしひの影

書よむとねぬ夜やいたく更けぬ闌　有坂　清子
かけも淋しきねやのともし火

さけふけてはのほみしかき燈火の　有坂いそ子
ひかりさひしき里のはなれ家

武夫のいくさかたりをまのあたり　有坂　秀子
聞くもうれしき灯のもと

くさゝ木もねむれる夜半にたゝ獨　御代ちう子
ともしひのみはおのか友なり

ふけてなほ文讀む人のありやせん　一番ヶ瀬績子
かすかにもるゝ窓のともし火

身をてらすひかりと遂になりぬべし　青羽　逸子
ふかきまなびの窓のともしひ

怠たらぬまなひの窓のともし火は　青羽茂枝子
やかて我身のひかりとはなれ

風寒みねやのとほしみこほるらん　佐藤かめを子
かげむすばるゝ冬の夜半かな

大君のれはす都はとことはに　小池美都子
ひかりあまねきともしひの影

ふくる夜に遠山てらのかねすみて　小池まさ子
こゝろはそくもてらす燈火

かゝけつゝ文よむ奥のともしひに　野崎　章子
こゝろの隈もてらしてもかな

さよ更けて光さひしくなりにけり　中山嘉壽子
まなひのまとのともし火の影

誰か學ふ窓にやある闌夜もすから　中山とみ子
光ほのかにてらすともしひ

打ちなひくまとの燈火さよふけて　中山とも子
光さひしくなりにけるかな

燈火のひかりありてそうはたまの　津田　德子
暗のよはにもまよはさりけり

ふみまなふまとの燈火ともとして　平山さほ子
道の中てもわけんとそ思ふ

ともしひも照さゞるらんくれ竹の　山本　勝子
うきよに迷ふやみのこゝろは

明らけく治まる御世のともしひは　廣田とみ子
むかしに變るひかりなりけり

怠らぬひとのこゝろもしられけり　日高かね子
まなびのまどのともしびの影

十一月廿日兼題　枯野

天　大坂江戸堀北通三丁目　守山比古子

折ふしのうつりかはるにつけて、野山のけしきたゞにやはればゆる。わけて冬の枯野のけしきころ、ものあはれさもいみしけれ。草どもは、おしなべてあさましうなりはて、尾花が袖などいひけむも、見る影もなくはかなげになりにたるに、しもの白うれける朝けなどは、あはれさいひしらすかし。まいで荻すゝきなどの、吹きわたる風に得たへで、下折れたるは、よになくことのすこき心ちせらるゝも、折から心からにやとそれぱゆる。

地　筑前嘉穂郡飯塚町　林　久子

茸かりし、紅葉見に、とひし人めさへ枯れはてゝ、山さとのさびしさ、いはんかたなし。花やかなりし、野へてふ野へも、霜風にふきやつされて、あさましうなりぬるに、昨日けふは、雲かきくもり、時雨さへふりしきれど、こゝかしこに、かれのこりし、秋のかたみの尾花が袖も、やれはてゝ、力なげに打まねくさまなど、とり〳〵いひしらす、あはれもまさりて、なか〳〵きのふのあきのことなども、思ひいてられすなん。

うちまねく尾花が袖もやれはてゝ
霜かれわたる野へのさむけさ

れもふとちわかて見し野の萩薄
枯れしすがたもなつかしき哉

人　芝區三田綱町二番地　八太光子

やちくさの錦は、はやう色あせて、霜の花のみ咲きはこりたる野末の氣しきこそ、すさましきかぎりなめれ、なべての草どもは、さながら枯れふして、ありしなごりもとゞめぬに、さをしかの志がらみふせし秋のふる枝、さては風にうらみしくずのかづらの、猶むかし思ひ出がほにて、さすがにまぎれぬも

あはれなり。野中を流るゝいさら川の、いつしか水かれて、落葉のちりうづみたるに、野菊のはかなげなるが、岸近う咲き殘りたる、常はうづもれて、ありとも志られぬ古塚の、道のかたへにあらはれて、村たてるすゝきのかれ〴〵に打ちなびきたる、とりどりこゝろ細きに、冬枯志らぬ姫小松の、ちとせの綠さへ、中々にさびしさを添ふることちぞする、ましてこがらしいと寒う、霜れきわたす小笹原の、月にきらめく夕などは、またたくふへき方もなしや。

佐々有鄰子

千ぐさ八千ぐさ花さきし秋のけしきにひきかへて、露霜こぼるみ空となり、紅葉の錦嵐にふきたたれ、藤袴はくちはて、葛のうらみし風の音はみぞれさそひきて、かれ尾花はさむさまねきて、みわたすかぎり冬ならぬはなし、やきづの原、のば野の末、あなさびしや。

及川千尋子

こゝは百敷の大宮所、袖をつらねてまゐのぼる、もものつかさの朝臣たち、いとにぎはゝしく、み階の下に咲き亂れたる櫻の花も、千歳の春の香に匂ひて、れもと人の小簾まく袖もにほひやすらん。しばらくありて、警蹕の聲遙かにきこえて、瀧口のもののふにや、先追ふ供奉の人々、はやこなたをさしてくるけはひなり、かたへの人に、今日のいでましいづくへかととふに、都をうつし給ふとぞいふある。あまりのかしこさに、道芝にぬかつきて、しばしあるほど、やう〳〵遠ざかり行くまゝに、やをら頭をあぐれど、こはいかに、今までいらかをならべし玉の宮居、跡なくきえて、身は、荒野の中にたゝずめり。霜枯のむら薄打ち亂れて、よわれる虫の聲々、いとあはれなり。いぞらの中に横はれるは、殘りし礎にやあらん、八重葎茂れるこ高き岡は、築山の名殘なるべし、こゝかしこ、秋はさすがに千草の花の咲き亂れたりと見ゆれど、今は一ッ色にぞ冬枯れにたる、只彼の老木の櫻のみぞ、草刈るうなゐの手折りしにや、下枝は悉くなくなりにたれど、僅かに古の面影をとゞめぬ。とみかうみそゞろに昔の忍ばれて、袂をしぼる折りしも、冬の日足いと短く、夕風身にしむと覺えて、忽めさむれど、身は文机に頬杖つきて、まどろみしゆめなりけり、見れど机の上

に讀みさして、くりひろげたるま丶、萬葉集ひと卷。

名取正代子

秋としいへど、ことく〱しうさびしうあはれなるものにいふめれど、冬枯の野邊のけしきは、又一しほまさりてなん。あはれ此時となりては、きのふ見し千草は、色あせはて丶、霜の花野と打かはり、露を布とたのみし虫の音も、かれ〱になり、きのふめでたしと見ゐつる紅葉も、なかど丶落葉して、時雨と共にふりしきり、吹とふきすさぶ木枯の風のすさまじさ、げにいふばかりなし。か丶るけしきも、定めなき世の定めなれど、春あるもの、いかでか秋にあはざらむ、人の身の上もしかなり、わかゝらむ程は、一生の春の時にして、學藝の種子を蒔くべき時なり。この時につとめずしては、老くちて後、くゆともかひなかるべし。されど、人々わかきにつとめはげみて、老後の樂をはかるべし。

鈴木昌子

春の野に、千草の花のいとうるはしき咲きみだれたる、夏の野の木蔭に蟬の聲涼しげになきたる、共に思ひすてかたき風情のあなれど、野分の風にすさびたる秋の野づらこそ、又なくあはれなれ、夏の名殘に、いとみづ〱しく淸けなる山々の木の葉の黄ばみたるは、霜の後にころはと思ひやられてゆかし。路もせにさきみちたるくさ〱の花の中にも、女郞花のなまめきたる、藤袴のゆかしげなる、桔梗の紫の色こまやかなる、尾花の優しげに打ちなびき、したり顏に咲き競ひしも、今はみる影もなき程ころあはれなれ。賤の童の謡ひつ丶、牛ひきて、かしこの森をすぐるは、物運びのかへりぢにやあらん。木枯のさは〱と吹く風も身にしみて、はらからと二人連れのさびしき野路の、折りふしにつけて、時にかへる雉子の鳴く聲も、こよなうあはれなり。やかて月も出でしが、いと冴ゑ渡りて、一のむら雲だになく、今よひも霜にやあらんと思はれぬ。雁かねの遠く鳴きわたるを聞くにつけても、秋のあはれはます心地しぬ。見るものにつけ聞くものにつけ、哀を催すは、うべ秋の枯野の面にぞありける。

瀬戸榮子

げに光陰は矢の如しとかや、秋草の花にあくがれ、日かげのかたむきしも忘らで、虫の音にたどろかさ

れて歸りしは、きのふのやうなりしに、いつしかに日のたちけん、此野の千草の色はかはりはて、露に匂ひし女郎花、はたやさしかりしなでしこ、萩も桔梗もうつろひて、いかに嵐のつよかりけむ、そこはたとなくうちたふれ。霜の花のみ我世がほなりけり。わづかにのこる白菊の、床しき色だにも、あはれをそふる種となりぬ、そが中にひともと立ちし枯尾花の、そよ吹く風にゆらぐを見れど、夜半に人のねざめきしも、事わりてぞかしと、そぞろをかしかりき、かゝる野を見るにつけ、胸に浮ぶは、世の中に榮枯盛衰のありてこそ、わづさゆみはりし心のいづるなれ、人毎に春のやうならんには、いそしみはげむ事もなくて、月よ花よとうかれつゝ、はては悲しき世とならん。

碓井信子

れく霜もまだふかゝらぬ此頃を、いつしか野べのけしきはかはりゆきて、昨日まで、千々に咲きみだれたる花も葉も、なべてあさましう成にたるろが中に、色をも香をもうつろひはてたる尾花の、昔をひ出にはのめき殘る姿こそ、一きはあはれにさびしかりけれ。

霜がれのつれなき野べにうちふして
のこるをどなのいろも寒けし

錦織さち子

いつしかも、春夏ははやすぎ、きのふの秋も又すぎはて、けふの冬とはなりにけり。春夏の野は、いづれもれなしけれど、花すゝき、萩などの霜かれし枯野こそ、物すごくもあはれにも思はゆれ。まして朝霜のれきそはり、辿りし人の跡も見えじ、そら高く歌ひし雲雀、五月のほとゝぎす、又芝生のむしの音、今はそもいづくに出行けん。彼處是處に錦かさりし紅葉はかなく梢をはなれて、むなしく霜の宿りとはなりぬ。よな〳〵月の枯野にれく霜に、物すごくうつろうこそかなしけれ。このほか見るもの聞くもの、皆物凄く、あはれかなしき外なかりけり、かれうたひけらく

見しあきの千草もいまはかれはてゝ
あはれさむけき冬ののべかな

福原菫子

冬の神はなどあさけ少き神はあらじ。きのふまで千種

に見ねし野べの景色も、いつしかうせて、あはれさびしき冬野の原とはなしぬ。桔梗、苅萱、女郎花などのところせきまで咲きみだれ、錦織りなしし秋の色も、はや霜にうつろひて、見る影もなく、枯れはて〻面白くなきしきりつる虫さへ、おのが住かを失ひて、いづち行きけん跡もなく、いとさう〳〵し。只をちこちにむら鳥のかなしげになくもあはれなり。あはれ昔の人の（秋の色のうつろふ野べを來てみれは哀れはかれぬ物にこそ有ける）とよみたまひしも、さこそ、されど冬枯は、春萠ね出でるためと、ものしりの云ひしことあれは、さまで冬の神をうらむべきかは。

梅本文子

いくたび時雨にさらされけん、野べのさまもあはれにうらさびて、見し秋の色としもなく、虫の音、道行く人も跡たねて、いみじき嵐のみぞ、所得顔に吹きすさぶなる。空定めなき雲のた〻ずまひに、みねつかくれつ、物すごくてらす、月のもとに、おばつかなげに、さしまねぐ枯尾花の、かひなきさまは、いと〻あはれに、はた心さびしや。

月めでし野べのちぐさは霜がれて
　あはれさむさに虫の音もせず

石原くにの子

曉の空にいと澄み渡りたる鐘の音とともに、いつもより起きて、背戸に出づれど、屋根はいと白う、霜の深く置き添はりて、いみじう寒さをおぼねぬ。されど、常のごと、朝餉の用意などして、父母にす〻め、妾も喰ひ終へつれど、母刀自より、親戚のかたへ、急ぎの用事言ひつけられぬ。されどすぐに門出して、近道よりものせんとて、間道の山越ねして、やがて親戚許りいたりつきぬ。とみのことなれど、使の用向もとく濟し果て〻、午後二時頃退り出で〻、此度は本道を經て歸るに、限りなき野原の景色、此頃とはうちかはり、千種の草の枯れ伏したるさま、淺ましう、溪川の堤の尾花も、霜にやつれて見るかげさへ寒けに、いとあはれなりけり。されど遙かあなたの峯の松むかりは、操かへせぬときは色なるは、こよなうをかしうて、あはれわが身も、これとひとしかれかしと、うなづき〳〵、手荷物を携へ日影のあかれるうちにと、急ぎにいそぎて、漸く家

に歸りつきぬる頃は、夕日の西に傾く頃なりけり、かくて父ぬしと母刀自とに挨拶して、今日の用事を話しけり。

無　　名

草むらになく虫の音もかれはてゝ、紅葉は風に、菊は霜にうつろひゆき、野末に見ゆる尾花か袖も、むかしをおもひいてかはなるも、きのふの俤もなし。をりしもふきおくる風のまに〳〵、いりあひつくる野寺のかねも、身にしむこゝちす、枯れ果てゝ、色も香もなき野へをてらす夕月の光、こよひの霜をほのめかしたるさま、心なき身も、さすがになみだもよほされて。

松岡濱子

文よむ窓をたゝきつゝ、ふりし時雨の神なし月も、はやいつしかに過ぎ去りて、霜ふり月のあしたよりふきたつ風に、遠近の木々の木の葉のちり亂れ。かへるての一葉二葉からうじて梢にのこれるも、何となう哀れなり。野邊の千草は殘る色なくうらかれて、やれ殘る尾花が袖、霜を頂く女郎花、秋のかたみはなくなりて、いとながき冬の日の、すみれさく野に遊びくらして、家路わするゝには引かへて、のこる入日のかげさびしく、おのづからにかへり路のいそがるゝもいとわびしうてなん。

北村孝子

夕の霧は時雨の雲に立ちかはり。朝の霜は草葉の霜におきかへて、末野の虫の音もたえて、霜に枯れ行く紅葉の、うら悲しく吹く風に、萩の下葉も、おく霜にいとゞ萎れ、なく鹿の涙にそめし紅葉の赤色さへも枯れはてゝ、常にわか行く袖を招くがごとくおばねたる岸の小草の、なつかしき袂は、いつしか殘りなく刈り拂はれて、八千草はみな霜がれ、小笹かはらには、風のみさわ立ちて、枯野のさまのあさましさ、物のあはれをちぬびつゝ、風にゆられうごく尾花がすへに、蔭ろひたるこそ、げに〳〵あはれさいはんかたなし。

北村貞子

かはり易きそうたてきや、錦たりなし〳〵秋の野も、今はさを鹿の鳴く音もたえ。しの薄たてるもいと寂しく、きのふ今日、露霜のおきて、哀れ八千草も冬枯れて、山田のわせ田おくて田も、はや刈り入れ、たゞ

をちこちにとり殘されし案山子のみ。いとゞしく吹く木枯に、わけもなく打ちまねくも、いと〳〵哀れにこそ。

今藤仲子

木枯の風颯々と音なひて、窓の戸たゝくさびしさに、さき殘りたるもやあらんと、幼き妹をさそひ、行くとはなしに、ちかき里にいでつ。見渡せばあなあはれ、昨日までは、錦とばかりながめてし千草のかず〳〵、風にふし霜にかれて、又見るものとてはなかりけり。只身を置くかげのなくなりにたるを、うらむる虫のこゑ〳〵、かれ〳〵に身にしむばかりなりけり。

玉のうてなに、美しき衣きかざりて、春の花秋のにしきときそひつゝ、冬がれの時を思はぬ人の身も、いつか世の風霜に枯れはてゝ、あはれはかなしと、世の人に此枯野とおなじにながめられんに、心してよと妹をさとしつつ、そこ〳〵に家にかへりぬ。

廣田とめ子

つばなぬきすみれつしも、昨日今日の心地ぞせられけるに、いつしか野への景色もかはりはてゝ、秋の七草のいろ〳〵に咲き匂ひしも、いまはなごりなくうつろひつくし、たゝ霜の花さく野べとなりて、とふ人かげもかれはてたるぞ、いと〳〵あはれなる。

かれを花まねくちからもおとろへて
あらしの外はとふ人もなし

山崎ゑつ子

秋の名殘を誰にとはましといひけむ、冬枯のゝべばかり、さびしく哀れなる物はあらずかし。千種に見えし花の錦も只ひとつさまに色もがれ行きて、其色なくうつろひ、さま〳〵になきしきりし虫のこゑこゑも、おとなくかれはてゝ、見渡す限り、あはれを催さぬはなし。このはかなき野づらの様につけて、我身の上をも思ひあはせられて、いとかなし。花はちれども、時來ぬれば、また咲きぬべし。小草は露をいたゞきて老いぬとも、又わかがへる春にあふべし。人は一度盛りすぎなば、再び花さく折もたのまれねば、わかき時よく務めはげみて、おとろへぬる冬にも、樂しくすぐさん事をこそ願ふべきことなれと、思ひつゝけてなん。

續木龜子

置く霜深く、雪かとばかりさえさゆる此朝、鶉の聲の聞ゆるは、程近き入野の薄が原なるべしと。行くとしもなくたどり行きて、見渡せば「あづさ弓入野のすゝき深ければ、朝行く人の袖ぞ露けき」と、よまれけむ、名におふ薄枯れ伏して、色香ゆかしく咲き匂ひたりし八千草の花はうつろひて、名も分きがたく野風にみだれ、玉とも見てし白露は、朝の霜とおきかはり、朝日夕日に錦を飾りし櫨の紅葉、殘りなく散りて、空しき梢を猶うち拂ふ木枯の風すさまじく、葛の枯葉を吹きかへして、女郎花折りに來つる野邊とも覺えぬまで、暫し見ぬ間にいたくもかはり果てけるよ。實に物の哀れは秋こそまされといふなるを、其秋にもなして、たとしへもなき冬枯の野邊のさまを、何とか言はまし、尾花がもとを頼みてしめし床も、あらはになりて、霜白く置き渡したる廣野の原を友もなくあさる鶉のかげ淋しく、近づけは驚きて逃げまどひ、漸くむぐらの中に、首のみをかくしたるぞいとおかしきに「旅人は入野のあさおふみしだき鳴くや鶉の床も殘さじ」と、むかし何がしの朝臣の詠じ給ひしを思ひ出でしも、慰むよしはなくて、たゞ人目も草も枯野の原を、きのふけふまだ山のはにのみ見初めし白雪の、こゝにも早くふりかくせよかしと、思ふばかりになん。

谷川清子

秋の野の草のたもとか花すゝき
　ほにいでゝまねく袖と見ゆらん

と、古き人のものせられしも、げにさる事にて、よく冬枯のさまを、うつしいだしたるものとこそいふべけれ。神無月の始めつかたつき／＼の飾り、吾れひとり人の住み家をはなれ、そゞろあるきけるに、まだおく霜も深からぬに、早や野べのけしきはいつしか變りゆき、おひ茂りし千草どもは、よにあさましくあはれになりにたるに、たゞ殘るは薄ばかりになん。されど、それだにおばめくばかりのさまにて、草の袂などいひけんけはひの、露見えぬぞ、いとあはれにをかしきや。

御代ちう子

野邊の景色をながむれば、春ののどかなる景色と事變りて、木々葉は大かた落ち盡し、咲き匂ひし千草も、今は枯れはてて、寂しさいはん方なきに、まし

て身をきる木枯の吹きそへて、あられまじりに降りくる雨の、今にも雪となりて、木々の梢に花咲せん様にて、心ぼそさげに云ふばかりなし。過ぎにし春、こゝに野遊びなせし折は、日うらゝかに、草木も笑を含み、いとのどかにて、鳥のねぐらを急ぐころ家路に歸りしが、今はたれ音なふものもあらずなん。されど人も芽出づる春のうるはしさに、霜がれの今を思はねど、何れ秋にあはではつる者にあらじかし。此枯野の景色を見るにつけ、そゞろに浮世のはかなさを感じて、斯くなん。

佐藤　かめを子

よろづの草霜かれ伏して、見所もなき冬の野に、一花咲きのこりたる女郎花などいと哀れなりまして、櫻の葉椋の葉など皆散り落ちたるに、野守の家の顯れて見えたるさへいとゞわびしくてなん。今年やよひの頃、友人と共に若菜摘まんとてたんぽゝの花蹈み分け、舞ふ小蝶の羽風に追ひうかれし其野邊も、今は跡方もなく枯れはてゝ、身にしむ者は木枯の風のみにて、打まねく袂と見しは一むらの尾花なりけり。たけ高く生ひたる萩すゝきなど、昔を思ひ出顔にうちなびくなどいと哀れなり。さらぬだに、枯野の原は物凄き者なるを、まいて霜のいとおきたる朝など、雨あられ交りて降りしく時など、いかにさびしからん。

朝時雨　溝口奈保子

志づの男が朝ての岡に日はてりて
萱苅そてにふる志ぐれかな

暮秋夕　中島房子

自からもろ木このはに風ふけは
秋の夕へそいとゞ淋しき

惜秋　島田好子

ゆくあきのわかれを惜むわかそては
涙しくるゝはかなかりけり

暮秋蟲　西村登羅子

何となくみにせまりきて悲しきは
くれゆく秋のむしの聲〱

山家暮秋　曾山道子

色ふかくそめし梢もちりそめて
あきふけにけりみやこへのさと

各所紅葉　秋園菊子

この頃はまなく志ぐれのふりくれは
ふるの山へのもみち照そふ

茸狩　西村佳子
さひしかる山のおくにも聲の志て
あきのか留るけふの楽しさ

祝天長節　有坂清子
皇天のあれましゝ日ときくからに
祝ふこゝろはひとにおくれし

山家秋深　溝口寛子
ちか比はろはみになりて更科の
里のあきこそ更けわたりけれ

山家暮秋　木村象子
ふきおるゝ山邊の里の夕嵐
さらにさひしきあきのくれ哉

雲間月　春永己巳子
秋風のはらへはやかてれはひくる
くものたえ間にすめる月かな

初雁　仝人
山里の小田のいな葉をふく風に
みたれてをつるはつかりの聲

埋火　遠山よし江子
まとゐしてかきおこしつゝ冬の夜の
寒さわするゝうつみひのもと

仝　遠山たゞ子
思ふどちまとゐをしつゝ今むかし
かたるも楽しうつみひのもと

意宇郡河本神社を過りしとき　津田徳子
河もとゝきけはたのもしなかれゆく
みもすゑひろといのるなりけり

道　仝人
神よゝりふみこそきつれまことてふ
たゝひとすちのみちやこのみち

天長の佳節を祝す　田巻ひてよ子
けふはそもいかなる日そけふは我か大君のあれまし
ゝ日なり家々の軒港内の船舶にもみな旭のみ旗をか
ゝけ聖壽の萬歳をことほく其聲うしふす山ともゐの
濤にひゝきていともにきはし天皇の御位につかせ給
ひてよりこゝに廿九年民みな御恩澤にうるほふうれ
しきことのかきりにこそ思ひ回せはは早三とせの昔

清國と開戰のとき大纛を廣島に進ませられ親しく軍事をしろしめし給ひ忠勇無二の我軍人は命をさゝけて奮戰せしかむ開闢以來いまたあらさる勝利にて清國は黃海の海戰に北洋艦隊の過半をうしなひ東洋一とはこれる旅順もまたたく間にをとしいれられわか軍の向ふ所實に敵なく清國も迷夢はしめてさめ和をこふに至るさて漸く平和の世となり世界各國も我國人の猛きをしりて膽を冷し大にをそるゝにいたれり今やこの戰勝の榮として我國威ます〳〵かゝやきわたれり今日天長の佳節にあひいさゝかこしかたをおもひうれしさにたへすつたなきふてをもかへりみす一筆こゝにものしぬ。

大君のあれましゝひとかしこくも
御影あふきていはふけふかな

大地震

大久保　みち子

月日を遂ひてあゆひの明かに、進み行く世ながら天災てふものは、人のさとりもて救ふすへのなきを、いかにかはせん、口惜きかぎりにこそはべれ、さる八月の三十一日は、いかなる日にやありけん、世にも恐ろしき、大いなるなゐの、陸奥の果てなる、我が秋田の里に起りしぞかなしき、此日や耕者の大厄とて恐るゝ二百十日に當りて、朝の程より、空のけはひなにとなう、替りたるに風さへ加はりて、人々安き心地もなく、まいて地の震ふこと、幾度となけれど其氣使はしさも一しほにてありし午後の五時十分といふ頃、雷の如き、響と共に、天つ空も碎け。巷も裂けん許に、地の震ふに己は我家の奥まりたる處に、居りしも如何にして外面にいでしか、只ゆめの心地になん、あたりなる人々の泣きさけぶこゑと、もののさけ碎くる音と、相かんじてすさまじく、果ては家のかたむくさまなどの、目のあたり見ゆるにいよ〳〵人心地なく、目をとぢしまゝ母君の袖にすがりぬ、しぞしへて、ゆるぎもまとほくなりたれど、ほとふといきして、まなこを定めてさしのぞくにそうじて、家はかたむき、天井は落ち、壁は間每〳〵われゆかみ、襖四五ひらは、こな〳〵にをれくだけ、目くるめき、心地きゐぬべうればゐたり、さてさきつ年の濃尾の大いなるなゐの、ことゝもそゝろにおもひ出てつ、こたびのはそれにもれとらじと人々云ひき、誰か言ひしろらことにや、近く再びかゝるわさはひ

のありてふことを、彼の一犬虚をほえて萬犬實を傳ふとの諺にもれず、きゝたちて人々やすき心地なくいたく心をいためたり、さる程に、日もくれかゝれば、庭の面に板戸、敷きならべて、人々と共に一夜をあかしぬ、まどろむさへに、心安からざりき、さてこの邊にまさりて、なほ強かりし處もありともきゝぬ、いかで、これ等の人々はいかにかありけん、親はらからを失ひ、子をなくしわかれ〱になりて、身もよもあらぬかなしさ、家を失ひて雨露をしのぎ得ぬもあるべし、秋もはや萩の上風身にしみて、やゝ木枯の吹きすさむころ、人々は如何にして、いのちながらふるらんなと思ひやるだに、かなしさいやまして、中々に人ことにはあらぬかし。

十二月兼題

- 五日
  - 歌……冬月
  - 文……寒夜讀書
- 廿日
  - 歌……都歳暮
  - 文……雪だるま

轉居

神田區錦町三丁目十五番地

三輪田眞佐子

女學雜誌

第四百二十九號 十一月十日發行

每月二回 十日 二十五日 發行

一部定價金十錢(無郵稅)一年前金金貳圓

特別廣告 今號より女教社發行「大和心」を本誌に合併候に付「大和心」へ前金御拂込みの講讀者には再後本誌相送り可申候也

發行所 東京市麴町區下六番町六番地 女學雜誌社

一手賣捌 東京神田表神保町 東京堂

女鑑第百貳拾號目錄

社告

○代價は通貨又は郵便爲替小爲替銀行爲替及通運にて本社へ御直送之事○郵便爲替は東京**銀座**郵便取扱所へ御振込可被下事○郵券を以て代金に換用せらるゝ時は一割増の事○別に領收證を出さず金員領收の上は直に女鑑を發送すべし若強ひて領收證を要せらるゝ方は別に證書郵送料御送附の事○未納税の來書は一切受取不申候事

女鑑
毎月五日廿日發行

定價		廣告料
一冊	十錢	五號活字廿三字詰一行金二十錢
六冊(三ヶ月分)	五十五錢	
十二冊(半年分)	壹圓	
全國無遞送料		

明治二十九年十一月十九日印刷
同　年十一月二十日發行

東京京橋區築地二丁目二十一番地
發行兼印刷人　川崎直衛
同　編輯人　山根勇藏
同　發行所(電話番號本局八八)　國光社

(印刷所　東京國光社印刷部)

(明治二十四年八月八日内務省許可)
(明治廿五年三月十二日遞信省認可)